

2013年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2013年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2014年 9月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FDと略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学のFD推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあつて、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かのを読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

「学生による授業評価アンケート」のさらなる活用に向けて

大学教育開発・支援センター
センター長・教学 IR 部会長
原田 久

本学における「学生による授業評価アンケート」（以下、アンケートという）は 2004 年度から始まり、2013 年度にちょうど 10 回目を迎えた。この間、アンケートの集計結果は学部等に提供され、各学部等の FD を促してきた。同時に、担当教員はアンケート結果について自己点検・評価を行い、所見票を執筆して、学生に公開してきた。各項目の数値は実施当初よりも有意に改善しており、このアンケートが本学の授業改善に貢献してきたことは明らかだと思われる。

この 10 年間で、各教員の意識の向上や学部等のカリキュラム改善にアンケートを利用するという目的は概ね達成されたといえよう。一方で、アンケート実施が継続的に行われたことにより、一種の「アンケート疲れ」が教員から発せられることも少なくない。「授業時間を利用し、毎年同じアンケートを繰り返し実施する意義はあるのか」という声が当センターに届くこともある。こうした声に応えるという意味でも、大学として今まで以上にアンケートのデータ活用をしていきたい。その手始めとして、当センター教学 IR*部会では、2013 年の教育改革推進会議にて「授業評価アンケートの利活用」の提案を行い、承認された。従来は学部等に限定されていたアンケートデータの分析主体に、大学（教育改革推進会議）が追加されたのである。同時期に、教育改革推進会議において「私語問題」が課題となり、教学 IR 部会はこれに協力してアンケートデータを使用した分析を行ない、分析の結果から、教員の授業への取り組みが私語を減少させようことを指摘した。

このようなデータ活用は本来、各学部等においてなされるものと考え。例えば、本報告書の学部等総評（P.19~58 参照）において、各学部等から授業時以外の学修時間の短さが指摘されている。学修時間を増加させるために有効な手立てを探るのであれば、アンケートデータを使った計量分析や、所見票の読み込みにより、参考となる情報を得ることが可能である。また、カリキュラム変更を行なった場合に、変更前後のアンケート結果を照らし合わせることも有意義であろう。さらに、こうした各学部等でのアンケート活用の状況を、全学で共有することも重要である。

今後も、各学部等における教育改善や FD に資するデータを提供できるアンケートとなるよう、学部等の意見を聴きながら制度の改善を続けて行きたい。また、本学全体の教育の質的向上に一層貢献できるよう、教学 IR 部会でも引き続き分析を進めていく予定である。

* IR : Institutional Research の略語。「機関研究」、「大学機関研究」と訳され、個々の大学の中にある様々な情報を収集し、数値化・可視化しその分析結果を教育・研究、学生支援、経営等に活用することを目的とする活動をさす。

目次

はじめに

「学生による授業評価アンケート」のさらなる活用に向けて

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	11
2-5 実施期間	11
2-6 回答者数	12
2-7 「所見票」の公開	12
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	13
3-1 科目担当者	13
3-2 学部等	13
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	24
4-3 理学部	27
4-4 社会学部	30
4-5 法学部	32
4-6 経営学部	35
4-7 異文化コミュニケーション学部	38
4-8 観光学部	41
4-9 コミュニティ福祉学部	44
4-10 現代心理学部	47
4-11 全学共通カリキュラム	50
4-12 学校・社会教育講座	56
5. 2013年度のまとめと今後の展望	59
6. 集計データ（資料編）	61
6-1 回答者数・回答率	61
6-2 全学集計	62
6-3 学部等別平均値	66
6-4 「グループ集計」科目一覧	78

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.6 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公

開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

2010年度は、定められた基本方針に拠って実施する初年度となり、上記の②「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

2011年度、2012年度は、基本方針に拠って上記の③「学部等の必要性に応じた選定」により実施した。

2013年度は、基本方針に拠って上記の②「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

2013年度前期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価0.1 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー

*①~⑦、⑧は「該当しない」も含む

授業評価に対する担当教員の所見

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5: 90%以上 4: 70~89% 3: 50~69% 2: 30~49% 1: 30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (合計して、1週間に 5.3時間以上、4.2~3時間、3.1~2時間、2.1時間未満、1.0時間)

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な厳密性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像授業教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5 段階による評価方式の設問を 23 設問、記述による評価欄を 2 箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2013 年度は、文学部（2 設問）、経済学部（6 設問）、理学部（4 設問）、観光学部（6 設問）、現代心理学部（3 設問）、全学共通カリキュラム（3 設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

2013年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。

立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 本枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)	
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部	(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)		学科
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)		(M) (N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年	(1) (2) (3) (4)
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	本学学部生以外	
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	特別外国人学生 (Special International Students) (特外)	
(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴講)	
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (その他)	

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない

〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		(5) (4) (3) (2) (1)
2) この授業に積極的に参加した		(5) (4) (3) (2) (1)
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		(5) (4) (3) (2) (1)
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		(5) (4) (3) (2) (1)
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		(5) (4) (3) (2) (1)
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) 聞きやすい話し方だった		(5) (4) (3) (2) (1)
2) 各回の授業内容の量が適切だった		(5) (4) (3) (2) (1)
3) 各回の授業のねらいは明確だった		(5) (4) (3) (2) (1)
4) 各回の授業内容は明確だった		(5) (4) (3) (2) (1)
5) 十分な静粛性が保たれた		(5) (4) (3) (2) (1)
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		(5) (4) (3) (2) (1)
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない (9)	(5) (4) (3) (2) (1)
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない (9)	(5) (4) (3) (2) (1)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		(5) (4) (3) (2) (1)
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		(5) (4) (3) (2) (1)
3) 自分で調べ、考える姿勢		(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		(5) (4) (3) (2) (1)
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。		
1) わかりやすい授業だった		(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業全体の目標が明確だった		(5) (4) (3) (2) (1)
3) 学問的興味をかきたてられた		(5) (4) (3) (2) (1)
4) この授業を受けて満足した		(5) (4) (3) (2) (1)

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

経済学部

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール2) 経済文献を読む力がついた
- 3) (基礎ゼミナール2) レジюмеやレポート作成の力がついた
- 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

※情報処理系科目とは、以下の科目をさす

情報処理入門、経済情報処理 A・C、政策情報処理 A、財務情報処理 A

理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

観光学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 5) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

全学共通カリキュラム

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2013年度は、3年に一度の「1教員1科目」の原則で実施する年度であった。

しかし、各学部等において、「1教員1科目」に加え、学部等の必要性に応じた科目も対象にしたいとの要望が寄せられたので、それらも実施対象とした。

各学部等の科目選定方針の詳細については、「4. 学部等総評」にて確認されたい。

2-4 実施科目数

実施科目数は前期 860 科目、後期 806 科目、合計 1,666 科目であった。

実施予定科目数は、前期 879 科目、後期 823 科目、合計 1,702 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 97.89%（1,666/1,702）、所見票提出率は 81.81%（1,363/1,666）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	287	149	138	275	141	134	234	122	112
経 済 学 部	166	98	68	165	97	68	150	86	64
理 学 部	102	49	53	99	48	51	86	42	44
社 会 学 部	140	68	72	136	68	68	111	53	58
法 学 部	74	27	47	72	26	46	59	18	41
経 営 学 部	179	102	77	175	100	75	102	60	42
異文化コミュニケーション学部	94	61	33	93	60	33	80	48	32
観 光 学 部	98	49	49	95	47	48	79	38	41
コミュニティ福祉学部	114	54	60	113	53	60	89	41	48
現 代 心 理 学 部	79	36	43	77	35	42	61	27	34
全学共通カリキュラム	304	147	157	303	147	156	252	127	125
学校・社会教育講座	65	39	26	63	38	25	60	35	25
合 計	1,702	879	823	1,666	860	806	1,363	697	666

2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第1週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

前期：2013年7月6日（土）～7月19日（金）

後期：2014年1月6日（月）～1月23日（木）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	12,741	9,019	9,934	6,599	22,675	15,618
経 済 学 部	13,935	7,659	4,698	2,771	18,633	10,430
理 学 部	3,881	2,706	3,546	2,115	7,427	4,821
社 会 学 部	11,652	6,525	8,411	4,619	20,063	11,144
法 学 部	8,650	4,122	10,335	4,072	18,985	8,194
経 営 学 部	8,153	5,434	7,296	4,004	15,449	9,438
異文化コミュニケーション学部	1,838	1,457	964	739	2,802	2,196
観 光 学 部	5,415	3,511	4,575	3,143	9,990	6,654
コミュニティ福祉学部	5,540	3,601	5,507	3,325	11,047	6,926
現 代 心 理 学 部	4,520	2,784	4,530	2,774	9,050	5,558
全学共通カリキュラム	23,496	14,546	19,649	11,746	43,145	26,292
学校・社会教育講座	2,312	1,773	1,322	983	3,634	2,756
合 計	102,133	63,137	80,767	46,890	182,900	110,027

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、WEB上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても閲覧に供している。

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の集計結果（下記①、②、③）をアンケート実施1～2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載した。

- ①集計結果票（p.15 参照）
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

これを基に、科目担当者には所見票の執筆を依頼した。

3-2 学部等

以下の方針で、集計結果を提供した。

1) 集計の方針

科目選定方針が「1 教員 1 科目」である本年度は、以下の方針にもとづき集計を行った。

- ①全学・学部・学科などにより集計する。学部等間比較を実施する。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、学部等別に回答率を算出した。（資料編 p.61 参照）

②平均値に関する集計

設問項目別に平均値を算出し、全学、学部等別、学科等別に算出した。学部等平均値については、5段階評価の回答者の割合を帯グラフで示した。また、授業規模別平均値、学年別平均値を全学、学部別に算出した（学部等平均値は、資料編 pp.62-77 参照）。

なお、2013 年度より、アンケート設問項目の「I1)出席率」および「I6)授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出した。

・ I1)出席率

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、
「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

・ I6)授業時以外に学習した時間

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、
「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

③設問項目間の相関

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

④グループ集計（実施学部のみ）

アンケート実施科目を学部等の指定によりグループ化し、設問ごとに回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した。
(pp.16-17 参照)

なお、グループ集計については「②平均値に関する集計」にある、「I1)出席率」および「I6)授業時以外に学習した時間」についての、数値を置き換えての算出はしなかった。

学部等には、上記「2)集計内容」と、科目担当者が執筆した所見票を送付し、学部等総評の執筆を依頼した。

2013年度前期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.54
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	2.00

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00
5) 十分な静粛性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6 (11%)	5 (9%)	3.47
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5 (9%)	4 (7%)	3.11
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31

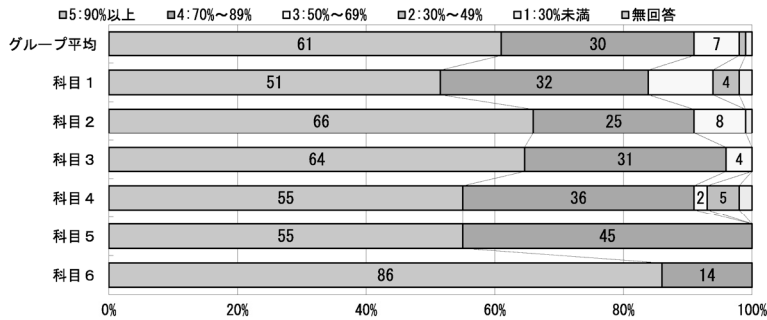
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14

設問別帯グラフ

(5:大いに思う 4:そう思う 3:どちらともいえない
2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

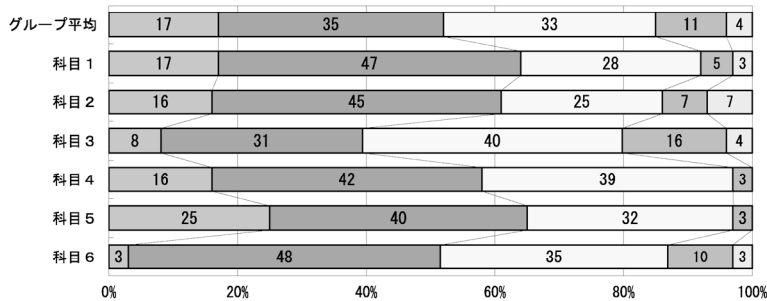
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	4.62	-
科目1	19	4.35	-
科目2	15	4.66	-
科目3	20	4.61	-
科目4	21	4.45	-
科目5	18	4.50	-
科目6	20	4.93	-

*「無回答」は除く

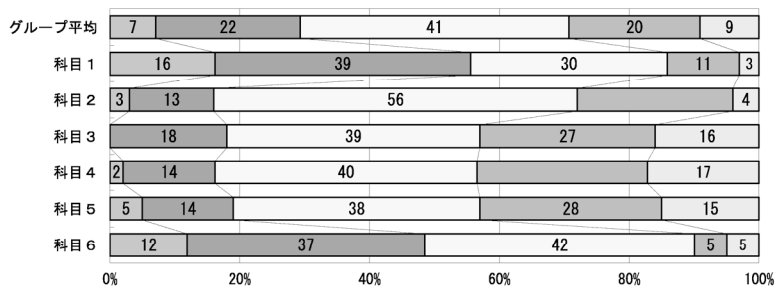
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目1	18	3.72	-
科目2	15	3.69	-
科目3	20	3.20	-
科目4	21	3.78	-
科目5	18	3.90	-
科目6	20	3.46	-

*「無回答」は除く

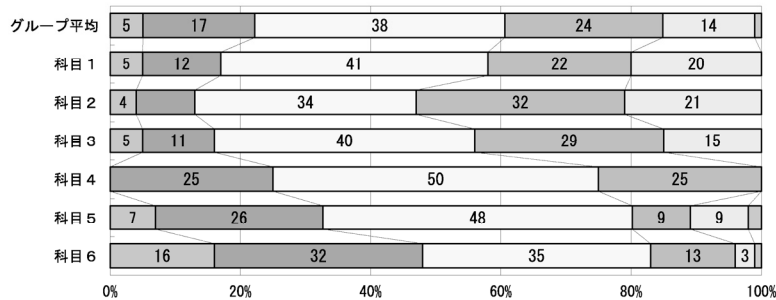
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目1	19	3.58	-
科目2	15	2.76	-
科目3	20	2.65	-
科目4	21	2.63	-
科目5	18	2.93	-
科目6	20	3.67	-

*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした

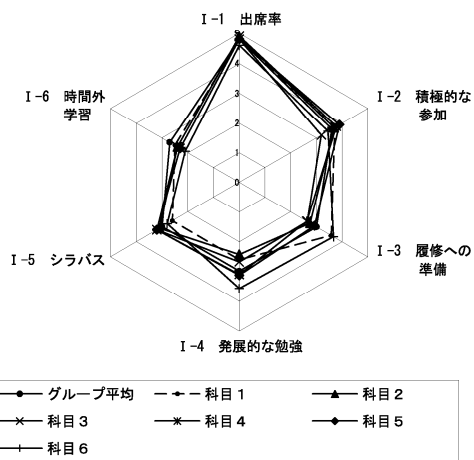


	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	111	2.98	2
科目1	19	2.60	-
科目2	15	2.42	-
科目3	20	2.67	-
科目4	21	3.09	-
科目5	17	3.12	1
科目6	19	3.56	1

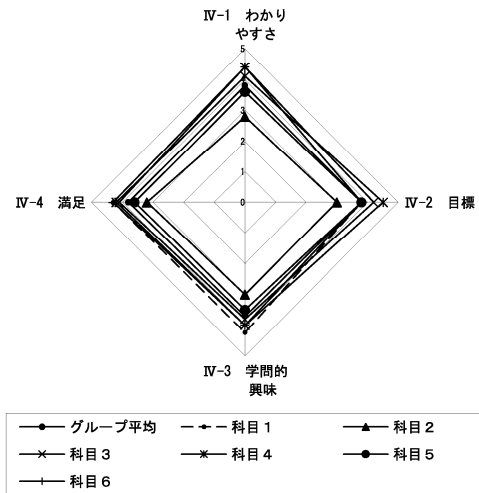
*「無回答」は除く

平均値のレーダーチャート

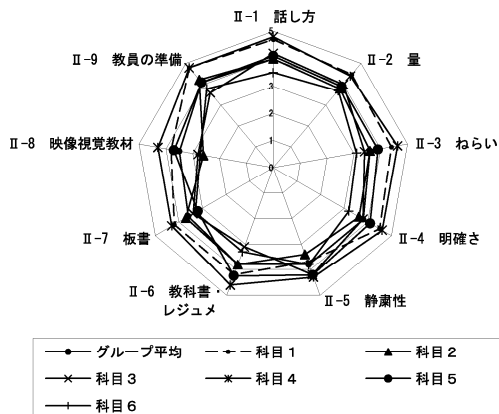
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



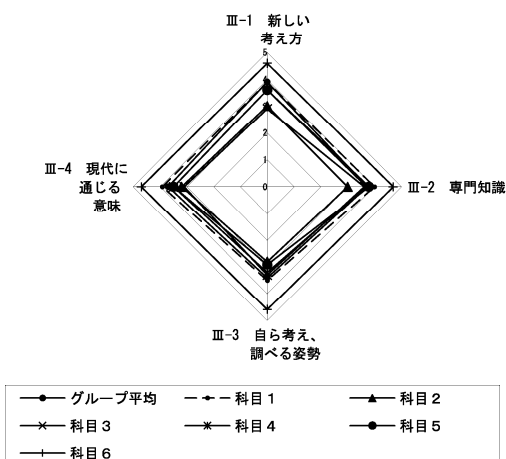
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いに思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

< I -1 >

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

< I -6 >

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

2013年度より「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については平均値の集計結果方法を変更した（P.13 参照）。このため、「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、2012年度以前の報告書および2013年度の他の項目と数値の意味が異なる。

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2013年度は3年に1度の全学的原則「1 教員 1 科目」に依拠し、以下の科目を選定した。

(1) 講義科目

(2) 一部の演習科目

①1年次必修科目

②2年次必修科目

③例外として、(1)および(2)の①②をいずれも担当しない教員についての演習科目
なお、設問項目は統一とし、基本的に前年度を踏襲した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

合計 275 (前期 141、後期 134) の科目についてアンケートが実施された。調査対象の科目総履修者数は 22,675 名であり、そのうち 15,618 名が調査に回答した。3年に1度のより網羅的な調査を行った年ではあるが、同じ選定方針を用いた 2010年に比べてもはるかに多くの科目および学生が対象とされ、例年にない大規模なアンケートが行われた。文学部生の回答率は 68.88%。これは全学平均回答率の 60.16%よりもかなり高く、一学部としてはもっとも多くの学生に回答を求めたにもかかわらず、全 10 学部中で 2 番目に高い回答率で、文学部生の授業の行われ方に対する一般的関心の高さを反映しているのだろう。アンケートに回答した文学部生の学年別分布は、1年次 2,647 名、2年次 5,370 名、3年次 5,009 名、4年次 2,214 名、不明 378 名。学年による差異は、文学部専門科目の講義科目 (原則として 1年次は履修不可) を多く履修している 2年および 3年次が複数授業で回答を行っていることによって、回答者のべ人数が膨れあがったのであろうと推測される。

I 「授業への取り組み方」について。平均 91.73 を示している I1 「出席率」は、全学の平均 91.01 をやや上回っており、文学部学生に関しては従来総じて出席率への高い意識を持っていたことを今年度も再確認したと言えるが、他学部との差違が顕著に現れているわけではなく (10 学部中第 4 位)、同じ選定方針をとった 2010 年と比較してもかなり多くの学生が回答対象となったという事態をさしひいても、授業への出席によせる文学部生の意識がやや変化しつつあると言えるかもしれない。つまり、これまではもっと多くの学生が少なくとも「自分は授業にほとんど出席していた」と考えていたのだが、こうした高揚しがちな意識が「地についた」と言えばよいのかもしれない。一方、I2 「授業への積極的な参加」では 3.94 (10 学部中第 4 位) で、全学平均 (3.91) をこれもわずかに上回る程度で例年並みに推移しており、やはり従来指摘されてきたように「勤勉に」授業に出席さえすれば事たれりとする学生の一般的傾向を今年度も確認することができるだろう。この傾向は I6 「当該授業に関し授業以外に学習した時間」が 0.92 とほぼ全学の平均 (0.90) 並み (10 学部中第 6 位) であることにさらに顕著に伺える。しかし一方で I4 「発展的学習」 3.32 (全学平均 3.19、10 学部中第 3 位) については比較的高い値を示している。さて、このことについては授業への受動的姿勢から積極的に自主学習傾向の進捗を意味するとオプティミスティックに受け止めればよいのか、授業以外に学習した時間そのものは少ないのに、どういう発展的学習が可能だったのか、そのあからさまなギャップをどのように見ればよいのか、悩むとこ

ろではある。Ⅰ5「シラバスの有用度」に関しては3.73と、全学平均3.57を上回っており、全10学部中第1位なので、シラバスへの文学部生の満足度は比較的高いと言えるだろう。シラバス作成方法が大幅に変更となった2014年度、この項目に関してどのような結果が出るか、注視する必要があるだろう。

続いてⅡ「授業の進め方」について。設問Ⅰ同様、すべての項目について全学平均を上回っており、Ⅱ1からⅡ9の各問のうちⅡ7「板書の仕方」に関する問をのぞき、全10学部中で3位以内に入っている。文学部生は提供されている授業に対し、おおむね満足感を得ていると考えてよいだろう。さてⅡ7「板書の仕方」については全学平均3.60に対し、文学部は3.67、全10学部中第4位。この点については、昨年の所見にも触れられていたように、授業における板書そのものの需要が減っており、むしろⅡ8に問われているような「映像視覚教材の使用」に依存的な授業が増えてきていることと無関係ではあるまい。以上は、他の多くの項目の回答者数が15,000人を突破しているのに対し、問7に対する回答者数が10,483人と5,000人程度少ないということにも端的に伺えるだろう。「映像視覚教材の使用」に関わるⅡ8であるが、全学平均4.13に対し4.18、全10学部中、異文化コミュニケーション学部と授業そのものに映像関係のものを多く展開していると考えられる現代心理学部に引き続いて第3位の成績であり、文学部科目担当教員の映像視覚教材の使用に一定以上の習熟と工夫がなされてきた結果ではないかと思われる一方、Ⅱ8に対する回答者数は11,065人で、上のⅡ7に続いて少ないことからすれば、文学部の授業においては伝統的な口伝式講義が依然として多く存在するのかもしれない。板書を含む視覚的教材そのものへの依存度が他に比べて低いのかもかもしれない。板書から映像視覚教材への過渡的な現象かもしれないと考える。今後、注視を必要とする項目であろう。Ⅱ6「教科書・参考文献の効果」に関する問が、全10学部中同率1位である結果は、上記の視覚教材授業への評価とともに、授業にかかわるマテリアルの利用全般に関して、文学部生がかなりの程度満足感を感じている証左と言えるであろう。

Ⅲ「授業から得たもの」について。やはり全学の平均をⅢ1からⅢ4の全てにおいて上回っており、Ⅲ3「自分で調べ考える姿勢」をのぞいて、すべて全10学部で第3位以内。Ⅲ3については全学平均3.47に対し、3.56、全10学部中第4位。従来より文学部生の自主性に関わる問題として、この所見にもたびたび触れられており、先に述べた自主学習時間の少なさとも連動し、いわゆる「よい授業」を受けたところですっかり満足してしまって、その先に進んでゆこうとする覇気にやや欠けるという結果が今年も明らかとなったと言えるだろう。

このように考えると、Ⅳ「授業の総合的評価」については、Ⅳ1からⅣ4に至るまで、やはり全学の平均をいずれも上回っており、かつまたすべての項目について全10学部中3位以内にはいっているという点も、多くの学生が「よい授業だと思っているのだな」と無邪気に喜んでいてばかりではいけないのかもしれない、むしろ文学部生に顕著な「ものわかりのよい学生」に対し、ちょうどよく消化しきれぬ程度の知的刺激を与えてよしとしているのではあるまいか、といったん自戒してみる必要もあるのかもしれない。

なお、文学部による設問に関しては、教室の大きさも受講者数もほぼ適切だったという回答が得られている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

学生からの評価結果については、ほとんどの教員が妥当なものと認めており、これまでの評価を踏まえ努力をした甲斐があったといったコメントや、必ずしも高評価を与えられなかった項目については積極的に今後授業の目標としたいといった前向きの所見が比較的多く見られ、中にはスペースが足りないぐらい長く丁寧な所見を寄せた教員もあった。もちろん学生がこちらの意図したところを誤解してとらえたことを遺憾に感じるといった所見も多く寄せられているのだが、それはむしろ担当教員の真摯な態度や熱意を物語っており、またこの学生評価アンケートの意義を強く認識しているがゆえと見てよいのではないだろうか。

上記2「集計データにみられる結果のまとめ」で分析したような授業外での自発的な取り組みや、あるいは授業そのものへの準備や復習にかかる時間の短さに関しては、予想通り、これに対する具体的な評価を所見として述べている教員数が少ないように見える（なかには「授業時間以外に準備をせよとは学生に問わなかったのが当然の結果だろう」といった回答もあった）。もちろん授業そのものに全力を傾倒する姿勢は大変好ましいことではあるが、授業から先へ、外へ、未来へ、学生を鼓舞して行くような姿勢が今後は教員にもものぞまれるのかもしれない。

4. 今後の改善に向けて

2013年度は、2010年度と同じく、授業に対する評価とともに、本学部学生の学業への意識や取り組みの傾向を全体的に検証する結果となった。その示すところは、シラバスの有効性、教科書等マテリアルの選択、教材機材の使用の効率性等を含め、授業自体に対する全体的満足度の高さと、それとおそらくは呼応するのであろう、従来より文学部生の動向について分析されている、授業外での学習時間の少なさが今回もまた指摘すべき特徴となっていたようだった。ただし、「文学部の学生はだいたい授業自体にはまじめに出ている」といった従来の傾向にやや変化のきざしがおとずれているのではないかと懸念されるような様子も垣間見え、授業の影響力が教室内でとどまることのない、学生として生きている自分たちの生活のその足下にさえ関わる、そんな生きたメッセージをもつ授業のために（いや、すでにそう工夫されているのに違いないので）、より明確直裁にアピールするようなトピックの選び方、講義方法の工夫、学生を積極的に授業外へと誘導してゆく試みなどが、今後教員各自によって自戒をこめつつ検討される必要があるかもしれない。

また今年度も例年通り現れたこの傾向は、例えば「自分は文学部で何を学んだか」をうまく説明できないために、就職活動時に「苦戦」する者が多いといわれている文学部生の課題をも照らしているのではないだろうか。「大学で何を学んだか」という問いに対する答えは決してマニュアル的に教わるものではなく、各自が努力や実践のなかから見出すべきものに違いないので、授業外に自主的に学問への取り組みを行うといった傾向の低さが、卒業を前にした学生が直面する具体的な苦境の潜在的徴候であるとも言えるのではないだろうか。文学部では「職業と人文学」という非常にユニークな授業を展開し、授業の外へ、クラスの外へ、あるいは大学の外へ、今ではない未来へ、と眼を向けさせようとする授業を展開してはいるが（多数の外部講師を招聘しているために授業評価対象科目としては選択されない）、このようにお膳立てされた授業ばかりではなく、一般の講義形式の授業であ

っても、演習形式の授業であっても、学生たちに授業内に過不足なく与えればよいといった、いわゆる「よい授業」のバランスをどこかで超脱してゆくような試みが自覚的になされてもよいのではないだろうか。

なお昨年度の課題として1「演習科目で適正レベルの課題を適量出す。そのチェックをきちんと行い学生にフィードバックする。試験やレポートに授業で扱わなかった発展的設問を加える」および2「演習は20名、講義は150名以下、TAを必ず付ける」という具体的課題が設けられていたが、いずれもできる限りの範囲で善処されたと言えるだろう（以上に関して特段に留意すべきフィードバック等は見られなかった）。また3「授業力のなお一層の向上を目指す更なる環境整備に取り組む姿勢を望みたい」という課題については、教員あるいは学部での努力に限界があり、全学をあげた取り組みに今後とも協働してゆきたい。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2013年度は概ね以下のような方針で科目を選定した。

- (1) 1教員1科目を原則に主要担当科目の前期科目で実施する。
- (2) 1教員1科目を原則とするが、必修科目等を担当する場合は、複数科目で実施する。
- (3) 必修・選択必修科目は全科目・全クラス実施する。
- (4) その他、グループ集計に用いる科目でも全クラス実施する。

2013年度は「1教員1科目」の全学方針のもと、各々の教員の主要担当科目でアンケートを実施した。学生側からの授業評価を通じて、今後の授業改善のための課題を各々の教員が認識するのが大きなねらいである。

また、必修・選択必修科目などの複数コマ開講されている科目、および積み上げ方式の科目について全科目・全クラス実施し、グループ集計を行った。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2013年度のアンケートは科目数としては165科目になった。回答者は延べ10,430名であり、履修者数と比した回答率は55.98%となり、全学平均の60.16%より低いものとなった。この要因の一つとしては、実施対象科目数が非常に多いということが挙げられよう。実際、科目数を絞った昨年度の回答率は71.72%であり、対象科目数が増えるにつれ、回答率も低下する傾向にあることは否めない。

今回の集計結果では、「I この授業へのあなたの取り組み方・・・」に関する項目を除けば、ほとんどの項目で全学平均と比べると低いものになっている。しかしながら、17項目中16項目は3.5以上の平均値を示しており、さらに4.00に近い項目も多々あることから、総じて授業に対する満足度や教育効果について、学部全体として特段に悪い評価となっているわけではない。

また、「I この授業へのあなたの取り組み方…」の項目で多くが全学平均より高い値となっている点は、教員側からは授業改善の努力の甲斐があるものとみなせるであろう。

ただし、設問「I 6 授業時以外に学習した時間」については、全学平均を上回ったものの、低い数値であることには変わりはなく、この点は学部全体としても一層の改善努力が必要であろう。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

今回、グループ集計では、学部の英語系科目、情報処理関連科目、コース演習系科目、必修系科目、1年次の基礎ゼミナール科目をグループ化した。最後の基礎ゼミナールにてについては、担当者（専任・助教・兼任）別にグループ化した。

3-2 グループ集計にみられる結果の概要

今回は上記のグループ化に沿って、11のグループを集計した。ここでは全11グループに関する詳細な記述は紙幅の都合から割愛して、全体的な傾向を指摘しておく。

まず、「情報処理入門」や「基礎ゼミナール 2」など、共通テキストの利用や担当者会議

などの授業情報の共有化を行っているものについては、全般的に評価も高く、クラスによる極端な差異もない。ただ、後者の「基礎ゼミナール2」については、兼任講師グループの一部に3ポイント未満の設問項目が散見される。これは授業情報の共有化をさらに緊密なものにする必要性を示しているといえよう。

一方、必修系科目の「経済学」、「経済原論A・B」、「簿記」では上記のような授業情報共有化が行われていないため、クラスによる評価の差異が相対的に大きく、また一部のクラスについて3ポイント未満の設問項目が散見される状態は改善の必要がある。なお、必修学科は少人数規模のクラス編成を取っているため、「簿記」については全体的に高い評価が得られているが、他方、上記のようにクラスによる極端な差異が生じている点は改善の検討が必要であろう。

少人数規模のクラス編成が功を奏していると考えられるのが、学部の英語系科目、情報処理関連科目、コース演習系科目である。これらは特段、授業情報の共有化を行っているわけではないが、結果としては、全般的に評価も高く、クラスによる極端な差異も見受けられない。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

165科目の授業のうち、所見票が提出されたのは150であり、提出「率」としては昨年度と大差ない。なお、提出されていない15科目担当のうち特に専任の担当者については、今後の注意喚起を教務主任から個別に促すことにしたい（単純な提出忘れと考えられる科目も多い）。

所見票への記述量については教員により大幅な差異が見受けられるが、内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）等について改善を求める学生からの指摘については、多くの教員が次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。

また、設問「I6 授業時以外に学習した時間」の少なさを懸念するコメントも多く、それへの工夫が必要であることが多くの教員に認識されている。

なお、設問II7（板書）と設問II8（映像視覚教材）との整合性に対して疑問を呈するコメントが複数見受けられる。いわゆる黒板の板書代わりに（あるいは併用で）パワーポイント等の視覚教材を用いる授業が多いためと思われる。むしろ設問区分としては、（板書 or パワーポイント）と（映像視覚教材：ビデオ等）とするほうが現状に沿っていると考えられる。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 肯定的評価として多い意見の集約

肯定的評価に関する記述は多様性に富んでいるが、あえて集約すれば、教員の説明や配布教材がよい、という意見は多く見受けられた。なお、授業の難易度や進行速度については、しばしば同一の科目内で肯定的なものとの否定的なものが混在しており、むしろ受講生側の属性が多岐に及んでいることの表れと考えられる。

5-2 否定的評価として多い意見の集約

否定的評価としては、板書や話し方、授業準備（コーラス等に教材をアップする手順等

も含む)に関するものが多い。これらについては教員の改善努力を期待したい。また授業内容とは関係ないが、教室の空調設備に関する苦情は極めて多い。

6. 今後の改善にむけて

グループ集計の結果でも述べたように、共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化を行っている科目では、全般的に高い評価となり、またクラス毎の評価のばらつきも小さくなっているが、他方、このような共有化が行われていない必修系科目では、クラスによる評価のばらつき、特に 3 ポイント未満の設問項目が散見される点は改善の必要があろう。これについては可能な限り、担当者会議の開催などを促す必要があろう。なお、一部の共通科目については、2016 年度のカリキュラム改革に併せて、担当者を見直しつつ、担当者会議の設定を予定している。

また最初に述べたように、「授業時以外に学習した時間」の少なさは学部教育全体が抱える問題である。なお、この問題は昨年度も指摘した課題でもあるが、一方、即効的な改善策によって単年度で数値が劇的に改善されるような容易な課題でもない。こうした本質的かつ困難な課題については、まずは教員の問題意識の共有化を進めつつ、個々の教員の改善策を促進する必要がある。同時に、上述の 2016 年度のカリキュラム改革の際には担当者会議等を通じて事前・事後学習についてもある程度の共通化を図る必要がある。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2013年度は、「学部等ごとに1教員1科目」の今年度の全学的方針を守りながら、例年通り科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2013年度についても昨年度同様、数学科は2010年度より実施の新カリキュラムで新たに設けた必修科目・選択必修科目を、物理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目を、化学科は必修講義科目と複数担当科目を除く選択講義科目を、生命理学科は原則として複数担当科目を除くすべての講義科目から教員一名あたり複数科目にならないように科目を選定した。理学部で行ってきた選定方針で、すでに全学的に3年に1度行う「1教員1科目」を含む形になっているため、前年を踏襲した選定を行った次第である。共通教育科目については、「1教員1科目」をすでに充足していること、独自にアンケートを行うこともあり、例年通り実施しなかった。

理学部独自の設問については、「(V1) シラバスに沿って授業が行われた」を新設し、従来の3つの設問も(V2)～(V4)に順に繰り下げ、継続して実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は64.9%であり、全学平均(60.2%)より高かった。学年ごとの回答者数は、1年生1,399名、2年生1,843名、3年生1,244名、4年生264名であり、2年生の回答者数が増加した分、全体の回答者数も増加した。

学生の授業への取り組み方についての集計結果を見ると、「(I2) 授業に積極的に参加した」に、「大いにそう思う・そう思う」と回答した学生は昨年度より微増の73%ほどだが、「(I3) 十分な準備ができていた」や「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」に、「大いにそう思う・そう思う」と回答した学生も微増の41～2%にとどまり、よい方向に進んでいるが、依然受動的な学習傾向の中にある。「(I1) 出席率」が「90%以上」と回答した学生が全体の74%を占めるが、「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関しては「3時間以上」と回答した学生が7.2%で、「1時間未満・0時間」が51%も占めており、時間面においてもやはり、授業に出るだけで自ら学ぶことのない学生が大勢いることがうかがえる。

2012年度の集計データと比較すると、「(II2) 授業内容の量が適切だった」を除いた各項目のポイントが、大きくはないがいずれについても上昇している。昨年度に続き全体的にポイントが上昇していることは、徐々に努力が実りつつあるとすると喜ばしいことである。中でも「(II5) 十分な静粛性」が0.11ポイント、「(II6) 教科書・授業レジュメプリント・参考文献が効果的」が0.10ポイントと、大きく上昇している。前者の(II5)は2012年度報告書の学部総評で上昇していないとの指摘があったので、それを受けて改善が図られた結果だとすると、本報告書が有意義に活用されたことになる。

学年別の比較では、昨年同様、出席率(I1)は学年経過にしたがって低下していた。一方で、「(I4) 授業をきっかけに発展的な勉強をした」の回答が1年生の3.16ポイントから4年生の3.46ポイントに、「(I6) 授業時以外に学習した時間」の回答が1年生の1.11時間ポイントから4年生の1.36時間ポイントに、「(III3) 自分で調べ、考える姿勢」の回答が1年生の3.48ポイントから4年生の3.75ポイントに徐々に増加しており、高学年に

なるにつれて授業への取り組み方が改善されており、学習意欲が増していることを示している。また、「(IV1) わかりやすい授業だった」(3.64→3.91)、「(IV2) 授業全体の目標が明確だった」(3.77→3.96)、「(IV4) この授業を受けて満足した」(3.66→3.87)と回答のポイントが学年進行でいずれも大きく上昇している。これは、高学年になるにつれて授業内容は高度化しているが、学生の理解力がそれを上回って成長し、授業の目標や内容を理解することができるようになってきていると考えられる。

学科別では、「(I2) 授業に積極的に参加した」と「(I6) 授業時以外に学習した時間」に関して、数学科のポイントが高い。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的評価を受けていると所見を述べている教員が多く見受けられた。同時に、授業以外の自主的な学習が低調であることへの懸念が多く示された。また、静粛性に関する所見(高評価、低評価)も多く見られた。静粛性が高いという評価を受けると同時に、他の授業で低評価も受けている教員からの所見には、学生の大学生としての資質に関する疑問も示されていた。また、同様なものとして、アンケート母集団として、学習時間が1時間に満たない学生や授業への出席が60%にも満たない学生からの回答は如何なものかとの所見も目に留まった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

説明が丁寧、板書が充実との高評価の一方、板書が多すぎるとの相反する評価について苦慮する所見が見受けられる。同様なものとして、授業の進行の速い・遅いと両意見がでることへの所見もある。配布資料の工夫や板書の改善、CHORUSの利用に関する記述が多く見受けられた。静粛性の改善を図る旨の記述もあった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学生の基礎学力や学ぶ力がかなり多様化していることを反映して、授業内容が難しい、多すぎるとの意見があることから、よりいっそうの授業内容の精選、配布資料の工夫、映写・動画資料の効果的利用、板書の改善、小テストの実施、課題の提示、CHORUSの活用などさまざまな改善策が述べられた。

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

あげられた意見としては、説明が丁寧・わかりやすい、質問に丁寧に答えてくれる、板書の仕方、パワーポイントの利用、理解を深めるための演習や小テスト、課題提示などが多い。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

あげられた意見としては、授業内容が難しい、内容量が多い、進み方が速い、板書が書き写しづらい、字が小さい、声が小さいなどが主なものであった。

5. 今後の改善に向けて

授業には出席するが、授業以外での自主的な学習が極端に少ない学生が大半であるというところが大きな問題である。前年度の本欄においても同様のことが課題として挙げられた。授業時間以外での学習を促すために、CHORUS を活用して復習用の課題を提供するなどの取り組みを行った教員もいたが、「(I 6) 授業時以外に学習した時間」の集計方法が前年度から変更されたため、残念ながら改善されたかどうかは明らかでない。

この問題は、教えられることで勉強はすべて事足りると考えている、教えられることに馴らされすぎ、自ら学んでいく能力に難のある学生が非常に多いことを物語っている。これまで努力してきたとおり、内容の精選、配布資料の充実、映写・動画資料の効果的利用、話し方や板書の工夫、CHORUS の活用など授業をする側のテクニカルな改善はよりいっそう行う必要があるが、学生の学ぶことへの意識改善も、授業内容とは別なものとして、図っていかねばならない。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

社会学部では、2012年度に新カリキュラムを導入したことを受け、授業評価アンケート対象科目の選定方針を以下のように定めた。学部の選定方針で、2013年度の全学的方針である「1教員1科目」を充足するため、前年を踏襲した選定をおこなった。

- ①必修科目は全て実施する。
- ②講義科目については、科目の種類を問わず、「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う。
- ③産業関係学科の科目は実施しない。

新カリキュラムでは従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に社会学の基礎教育の充実を目指すことになったため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要な意味を持つ。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、2012年度における基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更をおこなった。

②は基本的には2007年度以降の選定方針を踏襲しているものである。また③は、産業関係学科は2006年度からの学部再編において学生募集を停止しているという理由によるものである。

2. 集計データにみられる結果

2-1 授業規模別

大規模授業の最大の問題点は「私語の問題」であろう。この点をとらえた設問「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」は、50名以下では4.56（前年度は4.41）、51～100名では4.18（同4.04）、101～150名では3.61（同3.56）、151名以上は3.19（同3.40）と履修者数が増えるにしがって評価が下がるという相関関係が見られる。前年度と比較すると、150名までの規模では改善傾向が認められる一方、もっとも問題が深刻な151人以上の規模で数値が悪化している。

その他の設問に関しても、大規模授業であるほど「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢（を得ることができた）」「Ⅳ4 この授業を受けて満足した」の設問で評価が低いという関連が見られる。

2-2 学年別

2012年度と同様に、授業出席率は学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼ全ての設問について学年が進むにつれてスコアが高い傾向が見られる。特に、カテゴリⅢ「この授業から得ることができたもの」の中で設問「Ⅲ1 自分にとって新しい考え方・発想」は1年生3.68（前年度は3.64）、2年生3.80（同3.72）、3年生3.81（同3.85）、4年生4.02（同4.01）、および設問「Ⅲ4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」は1年生3.59（前年度は3.57）、2年生3.74（同3.67）、3年生3.80（同3.82）、4年生4.01

(同 3.97) では一貫して学年が上がるほどスコアも高くなっている。大学での勉学を通じて、学問のもつ意味・魅力への理解が深まっているようである。なお、前年度と比較すると1・2年次では平均点が上昇しており、多少なりとも低学年から学問の持つ意味や魅力への理解が深まっている傾向が認められる。

2-3 学科

授業に対する総合的な評価を表していると考えられる設問「IV4 この授業を受けて満足した」は社会学科 4.15 (前年度は 3.95)、現代文化学科 3.53 (同 3.67)、メディア社会学科 4.00 (同 3.88) である。ほかの項目についてもおおむね社会学科、メディア社会学科、現代文化学科の順にスコアが高い傾向が示されている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

担当教員による所見票の記述は膨大な量と内容をもつため、全体像をとりまとめるのは難しい。ただし、特に、「II5 十分な静粛性が保たれた」については大規模授業の担当教員を中心に問題があるという意見が多く寄せられている。また教室の音響・AV 設備に関する要望も出されている。

また、「I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の短さや「I4 発展的な勉強」が行われていないことも多く指摘されている。

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

大規模授業における「授業の静粛性が保たれない」ことに対するコメントが多く見られる。またわかりやすいレジュメの工夫、映像資料の活用といった「教材」や、ディスカッションの導入など授業形態の工夫については、肯定的な評価が多く見られた。

5. 今後の改善に向けて

2012 年度においては、1) 授業規模に起因する私語問題の対応、2) 学生の主体的・積極的な発展学習への動機づけを検討課題とした。このうち 1) については 2013 年度中に受講動向の分析を行い、これを踏まえて 2014 年度には、試行的に 2013 年度の他学部履修者が多かった科目について他学部履修者数に制限をかけることとした。また、2) については 2012 年度カリキュラム改訂時に、基礎演習においてプロジェクト・ベースド・ラーニング形式を導入し、主体的な学びの姿勢の醸成に取り組んでいる。この効果を検証していきたい。

一方、2012 年度カリキュラム改訂で導入した共通科目のなかで、社会学原論や社会調査法、基礎演習等の科目(群)においてワーキンググループを設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制を確立している。このことにより授業内容の共有化・共通化が図られており、今後の授業内容の改善につながる事が期待されている。こうした取り組みがよりよい授業に結びつくようにしていきたい。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。2013年度は、全教員（専任・兼任）につき授業評価アンケートを実施する年度に該当する。そこで、①講義科目については1教員1科目を対象とし、②演習科目は対象としない、との選定方針にもとづき、合計72科目につき授業評価アンケートを行った。大人数科目が多い法学部においては、講義科目における教育が容易ではないことに鑑み、これらの授業の改善を重視している一方、演習科目においては少人数を対象としておりアンケート調査が行いにくいという事情があるためである。

なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられたためである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

回答率は、43.16パーセントであり、全体の回答率60.16パーセントと比較して低い。アンケート対象とした講義科目においては出席が成績評価に反映されない場合が多く、授業の出席率が低いことが原因であると考えられる。こうした科目において出席率を上げる取り組みは継続的な検討課題となっている。

設問項目別平均値においては、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」(4.00)、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」(4.09)が、比較的高い値を示している。講義科目を対象としたアンケートにおいて、静粛性および授業の準備が評価されている点において、教員の努力や工夫があったことがうかがえる。これに対して、例年と同様に、Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.02)、Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(2.97)の値が低い。また、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」は、1時間未満(0.96)となっている。学生の受動的な学習態度が依然として見てとれることから、主体的な学習を促すために、より一層の工夫が必要とされている。

授業規模別平均値によれば、多くの設問項目において、授業の規模が大きくなるにしたがって平均値が下がっている。特に、50名以下の授業とそれ以上の規模の授業との差が大きい。大人数科目において学生の理解や満足を高める努力が求められると同時に、この結果が少人数科目のメリットを示しているとするれば、その拡充が検討されるべきかもしれない。

学年別平均値によれば、1年次生は、他の学年と比較して出席率が高い(92.05)一方、その他の設問項目において低い値を付けていることが分かる。特に、Ⅰ5「シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った」、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」における差が顕著である。大学の履修方法や講義のスタイルに慣れないことが原因であろう。これに対して、3年次生以降は、多くの設問項目において高い値を付けており、大学の授業に慣れると同時に、満足を感じていることが分かる。なお、4年次生の出席率が低い(80.67)、これにつ

いては、就職活動の影響が考えられる。

設問項目間の相関においては、授業の満足度（IV4「この授業を受けて満足した」）が、授業の分かりやすさ（IV1「わかりやすい授業だった」）と同時に、学問的刺激の程度（IV3「学問的興味をかきたてられた」）と強い相関を示している。また、IV3「学問的興味をかきたてられた」は、授業によってⅢ1「自分にとって新しい考え方・発想」を得られたという設問項目との関連が強い。授業においては、分かりやすさを追求するだけでなく、学生にとって新しい知見を示すなどして学問的興味をかきたてる工夫もまた求められているといえよう。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、授業評価の結果を真摯に受け止め、今後の授業の参考にしたいとしている。

アンケート項目の中では、I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の値が低いことを問題視し、改善の必要性を指摘するものが目立った。また、履修者数が多い科目においては、学生間にモチベーションのばらつきがあるとの指摘も見られた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」まとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

大人数科目においては、授業中の静粛性等に関する学生からの指摘への応答としてのものと思われるが、学生の集中力を維持し静粛を保つために、①5分間休憩を入れる、②私語をする学生を注意するなどの取り組みを行っている旨の、複数の教員によるコメントが見られた。

また、授業で配布されるレジュメや参考資料については、各教員が工夫を凝らしているが、それに対して、学生から分量・形式・内容などについてなお様々な要望が寄せられていることが伺われる。多くの教員が、指摘を受け止め、レジュメ等について検討を行っている。

なお、同じ科目を受講する学生間でも基礎知識等に大きな差があり、そのことから、授業の進度や難易度につき様々な評価がある点に困難を感じるとのコメントも見られた。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、授業改善に向けた具体的な取組みを示している。

特に目立ったのは、学生に積極的な学習を促す仕組みづくりに関する改善案である。①コーラスを利用して資料を事前に配布する、②予習用の課題を出す、③参考文献を示す、④質問票の提出を求める、⑤双方向型の授業を行う、⑥レポートや中間テストを課すなど、学生に授業時間外の学習を動機づける方策が示されている。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価の記述としては、授業内容、レジュメ、板書等が分かりやすかったとのコメントが多い。また、双方向型の授業やリアクション・ペーパー（メール）等、学生の意見を汲み取る方策について、肯定的なコメントが目立った。ゲストスピーカーや映像資料を用いた授業も、学生の興味をひいたようである。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価の記述としては、板書が見えない、声が聞こえない、空調がききづらいなど、大教室で授業が行われることに由来する苦情が目立った。

5. 今後の改善に向けて

アンケート結果からは、授業の内容については一定の評価が得られていることが分かる。今後は、これに加えて、学生に主体的・積極的な学習を動機づける必要があるだろう。前年度の検討課題を踏まえて、各教員が上述したような様々な試みを行っているため、さらに教員間で意見交換を行うなどの取り組みを考えていきたい。

なお、大教室の設備に由来する空調、音響等の問題点については、関係部局と協力して改善を行っていきたい。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、2～4年次演習を除くすべての科目において実施した。「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。学部の選定方針で、2013年度の全学的方針である「1教員1科目」を充足するため、例年通りの方針で実施した。なおBLPおよびBBL関連科目については、学部でも独自に詳細なアンケートをとっているため、2014年度以降は、演習に加えて、BLPおよびBBL関連科目も除いた全科目を対象に授業評価アンケートを実施していきたいと考えている。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率（I1）」の平均は93.08、「この授業に積極的に参加した（I2）」は4.05とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」（3.61）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」（3.56）、「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.51）は、相対的に低い。昨年度と同様、シラバスの記述については字数に限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていく努力が引き続き必要となる。特に問題となるのは、「授業時以外に学習した時間（I6）」が1.36であり、授業への積極的な参加は見られるものの、予習・復習などへの意識は必ずしも高いとは言えない結果であった。

授業の進め方については、「板書の仕方が適切だった（II7）」の平均3.79が最低であり、他のすべての項目は3.9以上という高得点であった。板書については、教員側の工夫も必要であるが、最近、プリントやレジュメの配布を当然と考える学生が増えてきており、板書が不得手となっていることとも関係があると推測できる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた（II9）」については、4.28という高い評価を得ている。学部として、現状に満足せず、今後も努力していく必要がある。

授業から得られたものを示す4項目についても、いずれも3.7以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」が最も高く4.07で、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が最も低く3.79であった。この項目については、授業規模別、学年別に見ても、いずれの規模・学年とも低く、昨年見られた規模による差がなく、全体的に自学自習の姿勢が低くなっている。とはいえ、グループ集計を行ったリーダーシップ入門、BL1、BL2といった演習系科目を各クラスで見ると、最低でも3.82（BL1、科目5）で、その他のすべてのクラスで4.08以上と高くなっている。このことから講義系科目においては当該項目の評価が相対的に低かったといえる。確かに、講義系科目や規模の大きい科目においては自ら調べ、考える姿勢を養うのは難しいが、このような姿勢を養成するための工夫が求められる。

総合的にみての評価では、「学問的興味をかきたてられた（IV3）」が3.94で最低点であり、他の項目は4.01以上であった。その意味では学生の満足度は全体的にみてもある程度は満たすことができていると評価できる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経営学部では、リーダーシップ入門、BL1、BL2の3科目についてグループ集計を行った。理由は、これらの科目が複数コマ展開されており、それぞれ担当教員は違うものの、同一のフォーマットによって開講されているからである。従って、これらの科目については、担当者ごとのばらつきが低いことが望ましいと考えている。

3-2 リーダーシップ入門

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間（I6）」をみると、4.28と高く、多くが2～3時間以上を勉強しており、授業外での活動が活発に行われていることがうかがえる。総合的評価の4項目は、18クラスの平均値がいずれも4.55～4.70と高い評価を受けている。出席率（I1）で5.0の最高得点をとっているクラスが8クラスとなっており、（出ていない学生はアンケートを提出していない可能性もあるが）学生の積極的参加の様子がうかがわれる。「学問的興味をかきたてられた（IV3）」「この授業を受けて満足した（IV4）」については、すべて4.0を超える高い評価であった。

3-3 BL1

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間（I6）」をみると、3.60であった。昨年よりも上がってはいるが、なお演習系としては低い数値となっている。最も高いクラスが4.11、最も低いクラスが3.18となっており、クラスの差も大きくなっている。リーダーシップ入門で見られたような活発な授業外学習はあまり見られていない。総合的評価の4項目は、12クラスすべて4.0以上であり、高い評価を得ているといえよう。昨年見られたクラス間の差も少なくなり、すべてのクラスで高い評価を受けている。

3-4 BL2

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間（I6）」をみると、クラス平均3.80で、8割以上が1時間以上、授業時以外に学習しており、昨年よりは若干上がった。クラス間での差も最も高いクラスが4.04、最も低いクラスが3.46と、昨年よりも差は縮小していて、全体として授業時間外での学習をおこなうようになった。総合的評価の4項目は、10クラス平均値がすべて4.1以上であり、高い評価を得ているといえよう。また、4項目中の「この授業を受けて満足した（IV4）」については、10クラス平均で4.22と高い評価を得た。クラス別にみると、一番高いクラスで4.56（2クラス）であり、一番低いクラスで3.88（1クラス）と差があったが、8クラスは4.0以上と高く、全体としては、高い評価を得ているといえる。

4. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているが、演習科目に比して講義系科目の評価は相対的に評価が下がる傾向がみられる。具体的に総合評価について、4つの設問項目すべてにおいて、講義の規模が大きくなるにつれて、評価が落ちる傾向にある。教室規模の違いによる比較で評価がこのような形で相違するのはある面で致し方のない面はあると考え

られる。また「十分な静肅性が保たれた（Ⅱ5）」の設問の評価は講義規模が大きくなると低くなる傾向があり、とりわけ150名以下では4.0を超えていた評価が、151名以上になると3.78と評価を下げている。この傾向も、やはり致し方のない点があるといえるが、とはいえ静肅性に関しては、継続的な努力が不可欠と考える。これまでも兼任講師も含めた教員間での情報の共有をおこない、注意を促すよう呼びかけており、昨年度よりはまだ改善されている。しかしながら、なお引き続き、大規模教室での肅清性の保持については、教員間での情報の共有と注意喚起を行っていく必要がある。

また、学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（Ⅰ3）」（3.61）、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（Ⅰ4）」（3.56）が相対的に低い。さらに授業時以外での学習時間（Ⅰ6）が1.36と決して高い値になってはいない。これらの数値から、授業時には積極的に参加をするが、それ以外の時間では、学問から離れてしまっている様子がうかがえる。この点については、それぞれの講義の形式があり、全ての授業で一樣に方法を論じることは難しい。まずは教員間の情報や意識の共有が必要であり、そのことを通じて授業以外での自発的学習を促進する教員の工夫が必要である。とはいえこの問題については、教員とともに学生の主体的な学習姿勢にも期待したい部分はある。

4-7. 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

全学の方針に従い「1 教員 1 科目」に加え、複数コマ展開必修科目（言語科目を除く）を対象とした。この選定方針のねらいは、各教員の授業改善という授業評価アンケートの主たる目的に加え、統一シラバスで行っている複数コマ展開必修科目についての評価を得ることで、学部カリキュラムを継続的に検証することにある。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

実施状況は、実施予定であった 94 科目に対し 93 科目（98.93%）が実施できた。全学平均が 97.89%と高水準であるが、この水準を引き上げることに貢献した値であると言える。

次に、設問項目別平均値について、各大項目別に述べる。まずは「授業への学生の取り組みについて」であるが、出席率（I1）は平均値が 94.25、授業への積極的参加（I2）については 4.12 と高めの数値で、多くの学生が授業に積極的に参加したことがわかる。また、事前学習や授業後の発展的学習といった授業時以外に学習した時間（I6）は平均値が 1.11 で、全学平均の 0.90 を上回り、学部等間比較でも、授業時間以外の学習時間を確保している群に入ることがわかる。授業規模別平均を見ると、履修者が「50 人以下」の科目では 1.29、「51 人～100 人」の科目では 0.82 となっている。授業規模が大きいほど授業時以外の学習時間が少なくなる傾向は全学の傾向と同じだと言えるが、「50 人以下」の科目は全学の授業規模別平均をやや上回り、「51 人～100 人」は全学の授業規模別平均をやや下回っていることから、本学部では履修者数の多い科目で授業時以外の学習を促すことを検討したい。

授業の進め方については、全体的に高い評価を得ている中で、「教員が授業の準備を周到に行っていた（II9）」「映像視覚教材の使用が効果的だった（II8）」の 2 項目が、学部等間比較で最も高い評価を得ていることがわかった。特に教員の授業準備への評価が高いことは、学生の本学部の教育への信頼を高めることに貢献するので、今後もこの水準を保ちたい。「この授業から得ることができたもの」の 4 項目のうち 3 項目が学部等間比較で第 1 位、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」が第 2 位と高水準である。学部内の学年別平均値を見ると、「自分にとって新しい考え方・発想（III1）」「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（III2）」「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味（III4）」の 3 項目は学年が上がるにつれ数値も高まる傾向があるが、「自分で調べ、考える姿勢（III3）」は 2 年次と 4 年次の値が最高値となっており、この傾向があるとは言えない。

総合的評価に関する 4 項目はすべて 4.06 以上と高い評価を得、特に「学問的興味をかきたてられた（IV3）」「この授業を受けて満足した（IV4）」は学部等間比較で最高値であった。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

統一カリキュラムで実施している必修科目の基礎演習 1（1 年次前期）、基礎演習 2（1 年次後期）、ならびに Cultural Exchange（2 年次前期）について、カリキュラム検証のためグループ集計を行った。

3-2 基礎演習1

全般的にみて授業への取り組みに積極的な姿勢がうかがえる結果となり、授業の進め方についても適切に行われていたと言えよう。特に、1週間あたりの授業外学習時間（I6）をみると、2時間以上学習したと回答した学生が32.8%と学部全体（17.4%）よりも多く、この科目が初年次に主体的な学習を促す役割を果たしていることがうかがえる。その他の項目も「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.39）「板書がわかりやすい（II7）」（3.76）以外は、平均値がすべて4.08以上の値である。

3-3 基礎演習2

基礎演習1同様に全体的には満足度の高い科目となっている。後期になっても出席率（I1）は4.85、参加度（I2）は4.52で、ともに高い平均値を維持しており、授業外学習時間（I6）で2時間以上学習している割合も36.4%と学部全体（17.4%）と比べて非常に高い。また、特に専門的知識の獲得（III2）や学問的興味（IV3）については前期より評価が若干高くなった。基礎演習1から基礎演習2に向けて、段階的に教材の量・難易度を上げるといって1年間のカリキュラムデザインを行い、また担当する複数教員が共通理解を十分に図った上で授業に臨んだ成果であると考えられる。

3-4 Cultural Exchange

実践を通して異文化対応能力を育成することを目的とした科目で、「授業外学習時間（I6）」（2.91）と「シラバスは受講に役立った（I5）」（3.49）をのぞくすべての項目について、平均値が4.0に近い値かそれ以上と高い評価となっている。授業外学習時間（I6）では、2時間以上学習している学生の割合が20.5%であり、学部全体（17.4%）よりも、高い傾向が見られた。基礎演習と比較すると、若干教員間のばらつきが見られるが、科目特性上、各教員の裁量に任せる部分が基礎演習よりも大きくなった結果ではないかと思われる。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

履修者からの肯定的な評価に満足できた、履修者が積極的に授業に参加できたというコメント以外で目立ったテーマは、シラバスの理解不足、予習不足などがある。所見票には以前の授業評価を刺激として、授業展開を工夫することで予習を促すことに成功した例なども見受けられ、教員側の工夫によって改善を図ることも可能なケースがあることもわかった。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ゲストセッションやインタラクティブな講義に対する肯定的なコメントのほか、学生間の私語に対する不満、パワーポイントの視聴覚教材の扱いへの要求に関するコメントが複数挙げられていた。ノートにとる必要がないという前提でパワーポイント画面を提示する教員側の意図と、画面にある情報はすべてノートに書き写したいと考える学生側の期待との間に、ずれがあることもあるようである。教員が教材の活用目的について適宜言及することで、学生の理解が得られる可能性があると思われる。また、機器の扱いが不慣れな点

を改善したいというコメントもあった。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業の難易度が高いという意見に対しては、難易度は維持した上で具体的な授業方法の改善により徹底した理解を図ろうという姿勢が見受けられる。視聴覚教材をさらに活用したい、学生のより主体的な学びを促したいというコメントもあった。一部の学生による私語の問題が授業改善の課題として挙げられているコメントもあった。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

授業の目的が明確である、説明の明確さや丁寧さ、映像教材・レジュメの効果的使用、リアクションペーパーへの丁寧なフィードバックなどが肯定的評価として多く見られ、教員による授業の質の向上に向けた工夫がうかがえる。

5-2 「否定的評価として多い意見の集約」

視聴覚教材に提示の仕方、他の学生の私語を批判するものもあった。授業への理解不足については、教員側からは予習不足の指摘もある。長期的に見て、学生の主体的な取り組みにつながるような予習の促し方について工夫する必要があるかもしれない。

6. 今後の改善に向けて

概して各授業への学生の評価は高く、教員がより質の高い教育ができるよう努力と工夫を重ねていることがうかがえる。前年度は今後の課題として、1) 授業外でどれだけ学習を促すか、2) 私語対策、3) 視聴覚教材のより効果的な活用が主なものとして挙げられていた。1) については、2014 年度に向けてシラバス執筆要領の大幅改訂があったので、その結果を待ちたい。2) については、学部の委員会の前後で、私語に対する意識向上について教員間で情報交換が持たれる機会があったように感じており、そのせいか、私語に対する批判は依然としてあるものの、件数としては多くはないように思われたので、一定の改善がなされているように思う。ひきつづきの課題としたい。3) については、視聴覚教材を活用する教員は多くなっているように思われるので、それ以上に提示のしかたや活用目的についての学生の期待のレベルが以前より高まった結果であるように思われる。今後は、視聴覚教材の提示の意図を履修者に明確に伝えるなどすることにより、さらなる改善が期待できよう。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

2013年度の全学の科目選定方針は「1 教員 1 科目」であった。観光学部では科目の選定にあたり、次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- 1) 原則としてひとりの教員に1科目以上を対象とする。
- 2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする。
- 3) 専門演習、実験、実技を伴う科目を対象としない。
- 4) 複数教員担当科目を対象としない。
- 5) 集中講義は対象としない。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

設問の平均値を見ると I1「授業全体を通じての出席率」が 89.79 と学部等別では低位となっている。I2「この授業に積極的に参加した」は 3.89 と平均的な数値であるが、I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」は 3.20 と低く、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」も 3.14 と低い。I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」は 0.76 と最下位に近く、学習に対する積極性のなさが見てとれる。

「II 授業の進め方」については概ね 4.00 を上回る高評価であるが、II7「板書のしかたが適切だった」については他学部と比較して低くはないものの 3.62 と高くはなく、II8「映像視覚教材の使用が効果的だった」の 4.17 の反動として表れた評価値であろう。

「III この授業から得ることができたもの」については概ね 3 点台後半となっており、授業の目的が達成されていると考えられるが、III3「自分で調べ、考える姿勢」については 3.43 と平均値が低く、大学での教育を十分に活用できていないことが窺える。

「IV 総合的にみて」については IV1「わかりやすい」は 3.96、IV2「授業全体の目標が明確」は 3.96、IV3「学問的興味をかきたてられた」は 3.82、IV4「この授業を受けて満足した」は 3.92 と好評であった。ただ、受講した授業を通じて、V4「現代社会における観光の重要性を認識した」が 3.57、V5「観光関連の仕事に興味をおぼえた」が 3.35、V6「観光を学ぶことに興味がわいた」が 3.53 となっており、観光学部が教育を通して学生たちに伝えようとしていることが十分に伝わっていないことが懸念される。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業評価結果を勘案して授業内容や教授法の改良を試みる先生方の所見は、その効果が確認できたというもので、授業評価が授業の改善に効果を発揮していることが確認できる。また、授業評価結果が低くともその原因についての考察が所見で示されており、今後の改善が期待できる。難易度の高い授業でも学生がついてくることに驚きを感じる先生がおられる一方で、為体な学生の受講態度を嘆かれる教員も存在し、学生が二極分化しているという認識も示されている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

声が小さい、板書の字が小さすぎて見えない、パワーポイントが早すぎて書き写せないといった意見に対して、マイクの着け方の変更、発声の工夫、字の拡大、スライドのレイアウト変更等が行われ、授業改善に対する教員側の意欲が見られる。配布物をカラー印刷にする要望については、CHORUSを利用してWEB上でカラー画像を見られるようにするという工夫も必要であろう。ゲストスピーカーについては総じて好評であるが、講義内容の新鮮さもさることながら、マンネリ化した授業に変化を与えていることが好評の理由となっている可能性がある。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

大規模教室の授業では、教員から学生へ一方通行の講義形式になりがちで静粛性が保ちにくい。しかしながら、大人数の授業であっても学生自らが「考える」機会を意識的に増やすことに取り組んでいる授業がある。配付プリントに学生が自ら書き込めるようにしたり、照明を逐次操作して覚醒を喚起したり、学生の学びを促す工夫が行われている。ディスカッション授業においても、事前に読んでおくべき課題図書を課すなど密度の濃い授業になるように模索が続けられている。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

「配付資料やパワーポイントが良く準備されており、具体的に事例を紹介しながら講義がなされて理解し易かった」、「考えることの大切さを実感できた」等と概ね好評であった。また、「静粛性が保たれていたので受講し易かった」、「授業を通して観光への関心が高まった」という意見もあった。全体としては、学生同士が授業中に議論をし、教員と問答をしながら問題点を明らかにしていく授業、ゲストスピーカーが実務の現場の様子を伝える授業などが好評であった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

「声が聴き取りにくい」、「板書の字が小さくて読みづらい」、「パワーポイントの進む速度がはやく書き写すのがたいへん」といった意見があった。また、「冷房が効きすぎる」といった空調温度に対する不満も散見される。「学生の私語が気になる」という意見もあり、大きな教室の後部は教壇からでは十分に学習環境が把握できていないことが分かる。

5. 今後の改善に向けて

観光学部教育の問題点は、受講する学生が予習や復習を十分に行っていないことと共に、受講した後で発展学習につなげたり、観光に関わる仕事に興味を抱く学生が多くないことである。昨年度の授業評価アンケート結果に対するコメントに一年次における予習学習や発展学習時間の確保が課題であると指摘していたが、クラス分けを行っている観光調査・研究法入門においてグループディスカッションを取り入れ、学生が自ら考え発表する機会を一年次に設けている。また、予習や発展学習の時間を確保することで更に深く学べることを学生自身に気づかせるため各学年向けの履修オリエンテーションや観光調査・研究法

入門の初回ガイダンス時に繰り返し指導を行った。昨年度の報告で積極的活用を目指したゲストスピーカーに関しては、予定枠 100 を大幅に超える 114 名をお迎えし、充実した授業を展開できた。

学生の反応がないという教員側の指摘があるが、教員や学部だけに留まる問題ではないと考えられるので入学直後の導入期教育として全学的に教育プログラムを検討すべきであろう。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2013年度の科目選定の基準は、以下の通りである。教員自身の選定を最重視しつつ、(1)全学的方針である1教員1科目の実施を原則とする、(2)資格科目を優先する、(3)演習科目・オムニバス科目は対象外とする、(4)昨年度実施科目を優先する。

この結果、延べ113科目においてアンケート調査が実施された。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

総合評価（質問項目Ⅳ）とその他の評価（設問項目Ⅰ～Ⅲ）との関連は次の通りである。まず「授業の分かりやすさ」（Ⅳ1）および「授業目標の明確さ」（Ⅳ2）は、平均値がそれぞれ3.99、4.02で、全学平均値3.96、3.98とほぼ同じである。また「授業の分かりやすさ」（Ⅳ1）をめぐっては、「シラバスが受講に役立った」（Ⅰ5）、「授業の進め方」（Ⅱ1～4、Ⅱ6～9）との関連があることを指摘できる。

「授業への満足度」（Ⅳ4）は、全学平均値3.93に対して3.97とやはりほぼ同じ数値である。そして「授業への取り組み方」（Ⅰ2、4、5）、「授業の進め方」（Ⅱ1～4、6～9）、「授業から得たもの」（Ⅲ全項目）が満足度と関連がある。

一方でその満足度が、「出席率」（Ⅰ1）、「事前事後学習」（Ⅰ3、6）と結びついていないことが、今回の結果にも如実に表れている。ことに「この授業に関連して、授業時間以外に学習した時間」（Ⅰ6）をめぐり、2時間に満たないと回答した学生が、昨年度の89.6%より微減したとはいえ、87.9%にもものぼっている。これは「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」（Ⅰ4）との質問に関して、「そう思う」以上の回答をした者が38.1%に留まっていることとも関連している。昨年度の35.7%よりは微増しつつも、学生の主体的・自律的な学習を促す対策を今後とも多角的に講じてゆく必要がある。

授業の進め方（質問項目Ⅱ）については、ほぼ全ての項目で比較的高い数値（3.97以上）を示しているが、「板書の仕方」（Ⅱ7）のみ、やや低い評価（3.63）である。

「静粛性の保持」（Ⅱ5）においては、4.05と比較的高い数値が出ている。しかしこれをどう解釈したらよいのか、非常に気になるところである。もしこれが、現状に慣れてしまっていることを意味する数値であるとしたら、きわめて由々しき事態である。

学年進行をめぐっては、学年が上がるに連れて出席率は減少するが、全体的な傾向として、その他いずれの項目においても次第に高くなっている。これは全学的な傾向と同じである。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

①学部共通科目、②学科専門科目、③専門関連科目にてグルーピングしたところ、グループ間での顕著な差異や特色は、全体的に認められなかった。そうしたなかで「この授業に関連して、授業時間以外に学習した時間」（Ⅰ6）において、①のグループが低く、スポーツウエルネス学科の②専門科目が高い数値となっていることが注目に値する。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

主として総合評価（IV）の結果を受け、「概ね妥当な評価である」とする記述が多かった。その一方で、「記述が少なく、所見に苦慮する」「もう少し率直に書いて欲しかった」といったコメントがあり、これは一時期に多数の科目にて調査する形式に起因するとも思われる。またレジュメを次回の、あるいは前回の講義にて配布することによって、事前事後学習を促すなど、学生の主体的な学習意欲を涵養する取り組みを記す所見も見られた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「質問を投げ掛ける」といった「参加型」の授業が評価されたことへの安堵感を記す所見が幾つか見られた。一方で、「積極的な関わりを学生に対して求める」だけで終わる記述も多く、学生の主体性・積極性を醸成する具体的方策を報知してゆく必要がある。

なお教室環境をめぐり、パワーポイントを用いるとスクリーンにて黒板が使用できなくなる。あるいは黒板を使っても照明が暗いため、学生から見づらいと指摘されたとの所見があった。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全般的に、教授法の仕方のさらなる改善、具体的にはパワーポイントによる授業の交通整理、画像資料の使用（バリアフリーに考慮しつつ）、板書法の工夫をめぐる所見が多かった。またコーラスを介して授業以外でも学生と対峙するというコメントが少なくなかった。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

パワーポイントや映像教材の使用、現場の実際について語るゲストスピーカーの招聘などが、肯定的な評価として記述されている。また、小グループに分かれての学生同士の議論、あるいは教員との対話も、かなりの学生から肯定的に捉えられている。なかでも目を引くのは、リアクションペーパーの授業への反映である。具体的な記述を2点、転載しておく。「他の人とのディスカッション。」「リアクションペーパー等からの質問や内容をレジュメに書くことで意識の高い人たちの興味をかきたてる工夫がされていてよかった。」

5-2 「否定的な評価として多い意見の集約」

教室の静粛性をめぐるコメントが一定数いることを重く受け止めたい。

あとは、「教授の話はずっと黙って聞くという姿勢の対象授業がパワーポイントなし板書は雑、と残念なものであった」といった教員側に改善の余地がある意見が数例ほど見られた。

しかし特筆すべきは、教員側が授業改善法として実施していることに対して、学生から否定的な評価がなされている場合があることである。具体的にはコーラスヘシラバスや資料等を掲載することによって事前事後学習を促すという方法をめぐる評価である。一例を転載すると、「授業資料を CHORUS にのせても毎回印刷するのは難しいので配ってほし

い」などである。

教員側には、事前事後学習のためのみならず、「主体性」を育成するためにも、学生自身による印刷を求めるとの意図があると思われる。それだけに、「学生サービス」と「主体性の育成」との調和点をどこに置くか、今後も検討してゆくべきであろう。

6. 今後の改善に向けて

2012年度の学部総評で示された改善点である授業時間外の自主的学習について、準備学習等課題の提示や自主的学習を促している授業方法の共有を行ったが、授業時間外の学習時間は、2012年度と2013年度を比較すると、ほぼ横ばいであった。

これを受け、2014年度に向けて取り組むべきより具体的な改善策として、次のことを示しておく。

自主的かつ主体的な学習意欲を醸成するため、レジュメや資料をコーラスへ掲載し、その閲覧を積極的に促す（個々の受講生がコーラスの教材にアクセスしたか否かは確認できる）。ブラックボードを介して、考えるべき課題を記した一斉メールを出す。リアクションペーパーを活用する。こうして授業以外でも学生が考える機会をつくり、双方向性の向上をはかる。

もちろん、こうした工夫を教員で共有することの必要性は指摘するまでもない。

また双方向性を確保するためには、受講者数の多さが大きな壁となる。抽選制度の拡大など、教務的な検討が引き続きなされるべきである。

以上が今回の結果から読み取れる改善点のまとめである。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を選定した。

- (1) 1 教員 1 科目
- (2) 「複数教員担当科目」は、原則として実施対象としない。
- (3) 専門演習、実験、集中や実技を伴う科目は実施対象としない。

「1 教員 1 科目」の選定に当たっては、専任教員および兼任講師が、各自で設定した授業運営方針のもと、単独で講義形式で展開しているものを基幹科目と考え、実施対象とした。そのため、演習・実習系科目や複数教員科目は対象としなかった。ただし、初年次導入基幹科目や新規設置科目については、授業効果の点検のため、実施対象に含めた。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の回答率は、61.41%であり、前年から 4.54 ポイントの上昇がみられ、大学全体の平均よりも 1.25 ポイント高かった。したがって、実施対象科目数が大幅に増えたにも関わらず、適切な実施が行われたと考えられる。

学部における傾向を見ると、「I：授業への取り組み方」については、「I1：授業への出席率」が 90%以上と回答した学生が 6 割、70-89%と回答した学生が 3 割以上を占め、概ね高い値であった。一方、「I6：授業時以外に学習した時間」は 1 時間未満と回答した学生が 4 割、0 時間と回答した学生が 3 割程度で、半数以上の学生が授業時以外にはあまり学習が行われていない結果となった。「I2：授業に積極的に参加した」の設問に「大いにそう思う」、「そう思う」回答した学生が 6 割 5 分程度であることから、授業時には積極的な学習が行われているものの、「I4：授業をきっかけに発展的な勉強をした」の設問に「大いにそう思う」、「そう思う」と答えた学生が 3 割 5 分程度であったことから、より自主的な学びを導くために、授業外学習を促進する工夫が必要であると考えられた。「II：授業の進め方」についての学生の評価は、全体的に高かった。特に、「II8：映像視覚教材の使用が効果的であった」という項目や「II9：教員は授業の準備を周到に行っていた」という項目の得点が高かったことから、各教員が適宜視聴覚資料を用いながら、学生の関心を引きつけるための工夫を行っていたと考えられる。また、「II5：十分な静粛性が保たれた」という項目の得点も高かった。私語を慎ませる措置は今後も継続して行うべきだと考えられる。「III：この授業から得ることができたもの」については、「III1：自分にとって新しい考え方・発想」、「III2：基本的な知識」について得点が高かったことから、授業を通じて、基礎的な知識および応用的・発展的な知見の両方を提供できていたと考えられる。一方、「III3：自分で調べ、考える姿勢」の得点が低く、「I：授業への取り組み方」について指摘したのと同様、積極的な自己学習を促すことが課題として考えられた。「IV：授業への総合評価」については、概ね高い評価であり、分かりやすく満足度の高い授業が提供できていたと考えられる。教育環境に関連する「V：学部独自の設問」についても概ね高い評価を得ていた。

学科別での評価の差では、映像身体学科の方が心理学科に比べ「I6：授業時以外に学習した時間」の得点が高い一方、心理学科の方が「II：授業の進め方」、「IV：授業への総合評価」、および「V3：研究設備への満足度」について相対的に得点が高かった。心理学科

では授業外学習の動機・機会を提供すること、映像身体学科では授業の展開方法や理解度を高める工夫が、特に必要であると考えられた。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

約 90% (77 科目中 69 科目) 科目で所見票が提出された。

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

兼任講師が担当する科目において、現代心理学部学生の学習意識・意欲の高さが指摘されていた。全体的には、「授業時間外における学習時間の確保」および「発展的な勉強を導く工夫」を行うことが今後の課題として指摘されていた。昨年度から継続して授業を担当している教員から、授業運営方法の改善を行いそれがどのように機能したかを検証する所見が得られるなど、学生の興味・関心を引きつける授業運営を目指す意識が高いことが伺えた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生から授業の進め方や講義・配布資料の内容に対して高い評価を得たことに対して、ポジティブに受け止める所見が目立った。一方で、授業時に直接質問がなかったが授業評価アンケートによって初めて学生から意見が出てきたこと、匿名性を利用した誹謗中傷、また学生自身の態度の問題を教員に対する要望として挙げられていることに戸惑う所見もあった。アンケートの実施に際して、回答者のモラル遵守を促す配慮も必要だと思われる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

各教員とも、各設問における回答結果および記述結果を参考に、真摯かつ具体的に改善点を考えており、授業運営方法と学生満足度の向上に積極的に取り組もうとする姿勢が明確に示されていた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

授業における工夫（小テストを導入する、視聴覚刺激を用いる、ゲストスピーカーを招聘する、レジュメを配布する、解説を丁寧にする、実習課題を導入する等）が行われたことに対して、学習意欲をかき立てられるなど、好意的な意見が寄せられていた。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業・教室環境に対する不満（受講人数に対して教室が狭い・広い、室温設定が不適切、黒板・スクリーンが見にくい、静音環境が維持されていない、配付資料が見づらい等）あるいは教員の態度・姿勢に対する不満（授業開始・終了時刻を守らない、授業準備が不十分、静音環境の維持に努めない）を訴える意見があった。

5. 今後の改善に向けて

前年度に課題として挙げられた、「学生自身の学習意欲や学ぶ姿勢を育てる」ことに対しては、各教員が学習意欲や知的好奇心を高める工夫を施した授業を行うことで、学生の授

業運営や授業内容に対する満足度が総合的に高まったことから、一定の成果が上がったと考えられる。しかしながら、依然として、自ら学習課題を見つけ、それを調べるような主体的・発展的な学習を導くことに課題を残していることも明らかになった。単に予習・復習課題を課したり、参考文献を挙げるのではなく、根本的な改善措置が必要であると考えられる。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

2013年度全学共通カリキュラムでは、

- (1) 大学・宗教・人権に関わる「立教 A」科目
- (2) "学部提供科目"である「領域別 A」科目（「～学を読む」の領域別 B は除いた）
- (3) 過去の一般教養を継承する色彩が強い「主題別 A」の 5 サブカテゴリにおける科目（①人間の探求、②社会への視点、③芸術・文化への招待、④心身への着目、⑤自然の理解）
- (4) 「総合自由科目」（10科目のみ）

において、1 教員 1 科目の全学方針のもと、授業評価アンケートを実施した。実施合計 303 科目、回答者数 26,292 人となった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

概観したところ、まず、「総合的にみて、この授業は… (IV)」の設問における「わかりやすい (IV1)」「目標が明確 (IV2)」「学問的興味をかきたてられた (IV3)」「満足した (IV4)」の質問項目については、全学の平均と比べて、若干ではあるが上回る得点を全カリ科目が得ているのは評価できるだろう。1 年生も履修する可能性の高い、一般教養的な授業という位置づけのためであろうか。

上記「総合的にみて、この授業は… (IV)」のカテゴリごとの集計を比較すると、「主題別 A④心身への着目」の満足度ならびに各項目点が高いことが注目される。健康やストレスマネジメント、実践的心理学などに学生からの関心が高いことが窺える。

反対に、宗教・人権・大学に関わる「立教 A」科目は、僅差とは言え、各項目の平均値がさほど高くなく、特に静粛性のポイントでは一番低い結果となった。履修の縛りが、学生のモチベーションに上手く結びついていないということが考えられるだろう。

また、目に付く点として「主題別 A②社会への視点」では、教室サイズ、受講者数に関して、満足度がやや低い結果となっている。典型的に一般教養的な大教室の講義が多かったことが理由であろうか。

「総合自由科目」については、今回の実施カテゴリの中では、ほとんどの質問項目に関して顕著に平均値が高いカテゴリとなった。もちろん、このカテゴリでは 10 科目しか実施しておらず、はっきりとしたことは言えないものの、英語でもおこなわれるアクティブ・ラーニング的な講義が、意欲のある学生を惹き付けているのかもしれない。

授業規模に関してはどうか。「50 名以下」「51～100 名」「101～150 名」「151 名以上」の 4 カテゴリで集計されているが、満足度とのはっきりとした相関は得られなかった。全カリであれば、300 名の履修制限をかけている現行のシステムは、当座は維持継続する価値があるものと思われる。もちろん教員としては、151 名から 300 名のあいだで満足度がどう変化するのも知りたいところではあるので、集計方法の工夫は今後の課題かもしれない。

学年別の平均値についてはどうだろうか。予想どおり「出席率 (I1)」は、学年が上がるごとに悪くなっている（おおよそ 1 年 93%、2 年 92%、3 年 89%、4 年 85%）。しかし「総合的にみて、この授業は (IV)」の設問における「わかりやすい (IV1)」「目標が明確 (IV2)」「学問的興味をかきたてられた (IV3)」「満足した (IV4)」という質問項目では、いずれも、学年が上がるにつれて得点が漸増している。学年が上がるにつれて、就職活動

など授業以外の事柄で忙しくなるものの、「授業を選ぶ目利き」の能力も相対的に上がり、より良い履修になってゆくのではないか。

「設問項目間の相関」において相関の特に強い項目を見ると、「各回の授業のねらいは明確（Ⅱ3）」「各回の授業内容は明確（Ⅱ4）」の数値が高い場合には、「わかりやすい授業（Ⅳ1）」「授業全体の目標が明確（Ⅳ2）」の数値も高くなっていたり、「教室の大きさは適切（Ⅴ1）」と「受講者数は適切（Ⅴ2）」とが相関していたりするなど、かなり自明とも言える結果が出ている。

3. 各カテゴリの総評

3-1 立教科目群

1) 立教A

2012年度の総評で指摘された、この科目群の履修区分上の位置づけに起因する構造的問題、すなわち学生の受講動機が明確でない場合があることと大人数科目が多いことは、依然アンケートの結果に明確に表れている。全カリ総合内のカテゴリ別の比較では、多くの質問項目で平均値が最下位、ないし領域別Aに次いで下から2番目である。縛りがきついで仕方なく履修している科目で学生の満足度が低くなりがちなのは当然であろう。しかし数字そのものは全カリ総合全体の平均値に着実に近づいてきている。全質問項目につき、若干ではあるが昨年度より高い数値が出ているのは素晴らしいことである。少しでも大人数授業のデメリットを減殺し受講意欲を掻き立てようという各教員の涙ぐましい努力のたまものと言えよう。履修者数に対するアンケート回答者数の割合、つまり出席率が総じて上がってきており、学生が出席しにくいはずの1時限・5時限でもかなりのレベルに達しつつあるのも、見逃せない点である。アンケートの教員所見欄から読み取れるのは、視聴覚教材やゲスト・スピーカーを活用し、リアクションペーパーを細かくチェックし、可能なら受講者のグループ討論を組織するなど、様々なテクニックを駆使しながら授業の活性化に奮闘している先生方の姿である。教室サイズや設備などの点で事務方のサポートが十分でなかったケースも稀にはあるようだが、科目を編成する側としては今後もそうした先生方の努力をしっかりと支え、情報交換の円滑化などの工夫を重ねることで、2016年のカリ改革につなげていけたらと考えている。

3-2 領域別科目群

1) 領域別A

このカテゴリは、2012年度に導入され、「〇〇学への招待」といった科目名で、提供する学部の学生は受講不可、という形式で運営されているカテゴリである。学生からの評価、それに対する教員のコメントも、そうした「このカテゴリそのものの性質」が関係していると思われるものが少なかった。

受講生が、ほとんど全ての学部から、1年生中心という構成であるために、専門性の照準をどこに置いたら良いのかということは、教員の側においても課題であるようだ。専門性の高い講義を展開してしまうと、学生から「内容が難しすぎて理解できない」という声もあったようだ。

もちろん、他のカテゴリとの共通性もある。全カリであることもあって、授業に対する

準備（予習・復習）、自主学習の機会などは少なく、今後の課題であろう。他方、映像資料、パワーポイントの活用、双方向の授業展開などは、概ね好意的な評価を受けている。さらに、自然科学系科目においては、実験を体験させる機会を設けたことが、学生の興味を大いにかきたてたようだ。

各科目担当者が記載する所見票には、採点・添削などについても TA を導入するべきなのではという記載もあった。海外の大学では一般教育の試験の採点を TA がおこなうことは珍しくない。中長期的な検討課題として、授業環境向上のための TA 活用方法があげられるだろう。また、所見票の記載に際し、アンケート全体の平均値などがいないため、全体の中でどのぐらいの評価なのかがわからないとの意見も 1 件あった。つまりは『授業改善の試み』の仕組み自体の改善を求められているわけである。

『一般教育』の中の『専門性』が高い授業の『入門』という、やや難しいタスクを背負ったこのカテゴリについて、2016 年度カリキュラム改革を見据えて「多角的な視点から検証」（前年度総評より）していくことが引き続き求められていると言えよう。

3-3 主題別科目群

1) 主題別 A

①人間への探求

2012 年度、「人間への探求」科目群の各項目は、概ね全カリ平均を上回る評点を獲得していたが、今年度はとりわけ授業の進め方に関する設問群（Ⅱ1～9）で、全カリ平均をやや下回る結果となった。受講生に各回の授業のねらい（Ⅱ3）や授業内容（Ⅱ4）を明確に伝えることができているか、各教員が今一度意識を向けて検討する必要があるだろう。加えて、教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった（Ⅱ6）、映像視覚資料の使用が効果的だった（Ⅱ8）、さらに教員は授業の準備を周到に行っていた（Ⅱ9）という設問項目でいずれも全カリ平均以下の評点となった点は誠に残念である。各教員には、配布資料やパワーポイントの効果的な利用について、さらなる工夫をお願いしたい。

授業中の静粛性（Ⅱ5）については、昨年の 3.95 から今年の 3.92 へとやや後退しており、全カリ平均も下回っている。しかしながら、各科目の評点を精査すると、50 名以下の科目ではかなり高い静粛性が保たれており、問題となっていない。一方、200 名以上が履修する科目の場合は、静粛性の高い授業と低い授業が混在する。私語をする学生に対しては、まずは警告を行い、それでも改善されなければ警告どおり退室させるなど、教員側の毅然とした態度が求められる。私語抑制に関する予備知識や注意点を事前に伝達する FD 活動の実施も、有効ではないだろうか。

この科目群には、自分にとって新しい考え方・発想（Ⅲ1）、加えて、自分で調べ考える姿勢（Ⅲ3）を得たと考える受講生が、全カリ平均よりも上回っている。その一方で、授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（Ⅲ2）についてはやや足りないと考えている受講生が存在する。昨年度、このカテゴリの科目の中には、教員が基本的な専門知識に関する資料を毎回配布したことが高評価につながったケースが確認されており、教員側の工夫が評価の改善につながるものと期待される。

②社会への視点

「この授業へのあなたの取り組み方について（Ⅰ）」で「社会への視点」のカテゴリが他の全カリ科目と比較して目立って数値が高いとか低いとかいったことは見受けられない。その他の項目においても、2012年度の数値と比較して全項目で上昇はしているが、他カテゴリも同様に数値が上昇している項目が多いため、特にこのカテゴリに限った分析をすることは難しい。「学部等による設問（Ⅴ）」（教室の大きさ、受講者数、環境設備についての質問）については、このカテゴリは他の全カリ科目より数値が低い傾向が見受けられ、また、2012年度の数値との比較においても低くなっている。全カリとしてコントロールできるのは受講者数制限くらいであるので、「学部等による設問（Ⅴ）」の数値は次年度以降も注視すべきかもしれない。

教員個々の所見票の記述を通覧するに、概ね高評価をいただけているとの記述が多い一方で、学生の自習時間の短さや、自ら調べる姿勢を涵養できなかった点を反省する記述が散見される。「社会への視点」では200人超の大人数科目となることが珍しくない。しかし、1限開講の科目には人が集まっていない傾向が見て取れるため、もともと意識の低い学生（更に、言語道断ではあるが、法学系以外の科目の幾つかでは学生の私語等の指摘もある）を相手にすることが多いと推測されるこのカテゴリにあって、学習意欲の喚起が不十分であることは教員の責めに帰しえないと考えられる。教員側は講義内容の改善という面ではやれることは概ねやった上での結果であると見受けられる（残るは試験評価の厳格化くらいであろうか）。

③芸術・文化への招待

このカテゴリは、各設問項目において、概ね全カリ平均を上回る評点を獲得している。聞きやすい話し方だった（Ⅱ1）、授業のねらいや内容が明確だった（Ⅱ3、Ⅱ4）という点に加えて、新しい考え方・発想（Ⅲ1）や基本的な専門知識（Ⅲ2）を得たと感じる受講者数は、昨年度は全カリ平均を下回っていたものの、今年度は軒並み改善されており、全カリ平均、またはそれを上回る結果となった。さらに授業の静粛性についても、全カリ平均よりかなり高い評点を得ており、100名を超える大規模クラスであっても静謐が保たれたクラスが少なからずあった。これは各担当教員の真摯な努力と取り組みの結果といえるだろう。

一方、全カリ平均をやや下回る項目として、授業全体を通じての出席率（Ⅰ1）、この授業に積極的に参加した（Ⅰ2）があげられる。関連して、授業で扱った内容がもつ、現代に通じる普遍的な意味（Ⅲ4）を得たと感じる受講生の割合は、全カリ平均よりもかなり低い結果となった。授業で扱われる内容がどのように現代に生きる受講生自身とつながるのかをぼんやりとしか把握できない一部の学生が、出席への意欲を後退させているとも考えられる。本来、その授業の内容がもつ普遍的な意味は、授業を受講する中で、受講生自身に気付いてほしいものである。とはいえ、このカテゴリの科目には歴史や芸術をテーマにするものが多いため、授業の内容をやや発展させるかたちで、芸術・文化・歴史を学ぶことの意義や、作品の価値や過去の事象を知ることが現代に生きる自分にどう結びつくのかについて、教員がいくつかの考え方を紹介した上で、学生に考えることや気付きを促すことも有効ではないだろうか。

④心身への着目

全カリ総合科目主題別 A「心身への着目」は、心理学、スポーツ科学、ウェルネス科学、医学の各分野から構成されている。アンケート回答者数と科目数から算出した平均クラスサイズは、アンケートを実施している 7 つの総合科目群中で最も多く、大人数科目が比較的多い傾向にあるのが特徴である。例年、このクラスサイズの大きさから静肅性の評価が他科目群と比較して低かったが、年々改善され、2013 年度は 4 点台に到達した。このことは、全カリ全体で取り組んでいる授業環境の整備の成果が出ているものと思われる。総合自由科目を抜かした他の講義群と比較すると、「授業の進め方 (Ⅱ)」に関する項目では 9 項目中 7 項目、「授業から得たもの (Ⅲ)」では 4 項目中 2 項目、「総合的評価 (Ⅳ)」では 4 項目すべてで最高値を示し、静肅性に対する取り組みと合わせて、担当する教員の講義形式、内容が高く評価されていることがわかる。一方で、「授業への取り組み (Ⅰ)」に関する項目では、他の講義科目と比較して、自学自習時間が最も短く、発展的な学習ができていない傾向が見られた。さらに、「授業から得たもの (Ⅲ)」に関する項目でも、新しい考え方や発想や専門知識を得ることができたが、自分で調べ、考える姿勢を得ることは十分にできていないことも、依然として示唆された。

これらの結果から、大人数科目が多い中、各教員が工夫して授業を展開し、静肅性も改善されていることが示唆された。今後は、CHORUS などの自学自習支援システムを担当教員に推薦しながら、自分で調べ、考える姿勢を習得できるような、さらなる工夫が必要であると考える。

⑤自然の理解

評価は全体として全カリの他の分野と比較して大きな違いはない。授業内容の量 (Ⅱ2)、各回の授業のねらい (Ⅱ3)、内容の明確さ (Ⅱ4) などに関する評価項目で高い評価を得ている。これは、昨年に引き続き、高校理科の学習が不十分な文系学生に対する指導方法を各教員が工夫していることの表れと理解したい。教室の静肅性 (Ⅱ5) についても平均的には良好であったが、二極化する傾向が見て取れる。教員所見でも、多くの講義では静肅が保たれたとされているが、静肅性に難があったとする所見もあった。これは開講時間や受講人数に大きく依存していると考えられる。一方、自宅学習など、講義時間外の学習は他カテゴリと同様に少ない (I6)。これは特定の講義や分野に限った話ではなく、一般的な傾向と思われる。総合的に見て、わかりやすさ (Ⅳ1)、満足度 (Ⅳ4) 等で高い評価となっており、カリキュラムの実施は順調に行われたと判断できる。教員所見でも、学生の積極性が感じられたとする記述が目立った。内容面においても教員の所見は概ね肯定的であったが、専門性が高いと学生がついて来られず、反対に容易すぎても退屈になる、というジレンマを訴える所見もあった。授業評価が高く、学生が授業を理解できているからといって、講義レベルが低くても意味がない。総合的な授業展開についてさらに模索していく必要がある。

3-4 総合自由科目

総合自由科目群のアンケート対象科目は現在のところ 10 科目のみで、いずれも少人数科目なので、アンケート実施の意味あいそのものが他の科目群と異なっている。いずれの質

問項目についても平均値が他の科目群に比べ顕著に高いのは、少人数のためとも考えられるが、むしろ英語で授業を受けるということ自体が受講生にとり新鮮で、受講意欲が高いことが、こうした数字に表れていると見たほうがよいであろう。教員所見欄からは、英語能力の低い受講生への対応に苦慮しながらも、教員が労をいとわず授業改善に努めていることがわかる。今後、学生が上のクラスへ上がるにつれ、授業運営の困難性は増すと予想されるが、この勢いで展開していけば何とか乗り切れるであろう。

4. 今後に向けて

今後も、立教の理念は活かしつつ、不人気な分野については再検証し、人気・ニーズのある分野へは力を入れるなど、教学の強化を促進してゆくべきである。また、履修しやすい・理解しやすいシンプルな制度設計・カテゴリ設計も求められる。

長年の課題である静粛性については、幾分かの改善は見受けられるものの、今後も FD 活動などを通じて授業環境の向上を図ってゆくことが望ましいだろう。

最後に、この授業評価アンケートは、大学として、3年に1度、1教員1科目というルールに基づき実施することとなっている。一方、全カリは毎年度、同ルールに基づいたアンケートを実施してきた。授業回数の確保が強く要請されている中、かなりの時間を要するアンケートを授業内に実施することが難しいという現実もある。複数の全カリ総合チームメンバーから、2～3年に1度の実施でもよいのではないかという意見もあったため、より効果的なアンケート実施の方法を検討してゆきたい。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定の方針とねらい

各課程ともに「講義科目を対象に1教員1科目」を選定して実施した。なお、履修者が5名を下まわった場合、実施するかとりやめるかについては、各課程の判断によることとした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

学校・社会教育講座の調査対象科目の履修者数は3,634名、回答者数は2,756名であり、回答率は75.84%となっている。これは「授業全体を通じての出席率の高さ」（平均値94.00）を反映したものと考えられる。

設問項目別平均値を見るならば、全体としてⅡ（授業の進め方）とⅣ（総合的評価）の設問項目群では、おおむね4以上の評価となっている。Ⅱ7「板書の仕方」やⅣ3「学問的興味」についても平均値としては3点台後半であるが、標準偏差は1前後となっており、総じて高い評価を得ていると言えよう。Ⅰ（学生の授業への取り組み方）についての設問項目群でも、Ⅰ1「出席率」やⅠ2「積極的参加」、またⅠ4「授業をきっかけとする発展的な勉強」は全学平均に比して高い平均値となっており、Ⅲ（授業から得ることができたもの）の設問項目群では、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」以外は、4前後の平均値となっている。

他方、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の平均値（0.83）は全学の平均値を下回っている。授業時以外の学習時間が短いという結果については、Ⅰ4「授業をきっかけに発展的な勉強をした」への相対的に高い評価（平均値3.36、標準偏差1.04）と矛盾するようであるが、少なくとも受講に際しての事前準備の学習時間が短いという特徴は浮き彫りになっていると思われる。

上述のように、Ⅲの設問項目群では、Ⅲ1「新しい考え方・発想」やⅢ2「基本的な専門知識」について設問項目での平均値は4以上であるものの、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」については3点台にとどまっている（平均値3.61、標準偏差1.01）。授業時間内では積極的受講をしているという実感を学生が持つことはできていても、その後につながる学生の自主的・主体的な学びの習慣づけを行うには至っていないと考えられる。

授業規模別平均値では、総じて50名以下の規模では平均値が高く、101～150名の規模では平均値は下がっている（今回のアンケート実施科目では151名以上の規模の該当科目は無かった）。ただし、50名以下でもⅠ6「授業時以外に学習時間に関する設問」の平均値が0.89となっており（全学の50名以下の平均値は1.16）、授業規模に関わらず授業時以外の学習時間が短いという結果が出ている。

学年別延べ回答者数では、4年生の回答者が際立って少ない（72名）。これは学校・社会教育講座の各課程のカリキュラムでは学年が進むに従って、実習と結びつく演習的科目と実習科目そのものの履修が中心となり、それらの科目が本アンケートの対象科目から除外されていることも関係していると考えられる。学年別平均値では、3年生と4年生で、Ⅳ3「学問的興味」の設問項目の平均値が1年生と2年生に比べて高いことが特徴である。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの担当教員の所見が、学生の熱心さ、積極性を指摘している。他方で、I6の授業時以外に学習した時間が短いという結果については、兼任講師を含め、継続して担当している教員からは、授業改善の工夫がなかなか数値にあらわれにくい項目として強く意識されていることがわかる。中には、学生は授業時の発表に向けての準備や、関連する発展的な学習を授業時以外に行っていることは間違いなく、結果を意外と受けとめる所見も見られた。この設問項目についての数値上の改善に向けての努力を続けていく必要があることも確かであるが、学生自身の自覚と実際に授業時以外に学習している時間にずれが存在している可能性について、検討する余地も残されているように思われる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

配付資料、映像の活用など教材の工夫が、それぞれの科目で行われている様子が見られる。また、グループワーク、グループディスカッションや、前時のリアクションペーパーについて、次時に担当教員が紹介・コメントするといった授業の進め方の工夫が概ね好評であることについて、学生相互、学生-教員相互の意思疎通の質を高めることの重要性を、担当教員自身が改めて認識していることがわかる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業を進める際の、板書やパワーポイントなどの効果的な使用のあり方については、その使用のバランスを含めて、担当教員が模索しており、今後も改善を続けていきたいとの声が多くなかった。また、100名前後の授業規模であっても、学生同士の議論を取り入れ、効果もあがったとして、今後もさらにそのような双方向のある授業の進め方を深めたいとの声も聞かれた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

教員の入念な資料準備をはじめとする熱心な姿勢に対する高評価が多かった。時事的事項の紹介とそれに対する教員からの見方の提示に刺激を受けたとする意見とともに、グループディスカッションや他の学生のコメント紹介など、他の参加者の考え方を知る機会を提供する授業の進め方についての肯定的評価が目立っている。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

例年見られる意見であるが、板書の見にくさへの指摘やパワーポイントの使い方を改善してほしいとの意見が見られた。また、ごく一部であるが、静粛性が保たれていないことについての指摘が集中している科目があり、担当教員の所見でもその改善が喫緊の課題である旨が書かれている。

5. 今後の改善に向けて

前年度の「今後の改善に向けて」では、おおむねどの課程でも学生の評価は高いものの

「学生個々の学問的な興味を刺激し、さらに発展的な取り組みへと自主的に進むことを後押しするということまでは至っていない」点を改善の余地としてあげていた。本年度、「授業をきっかけとする発展的な勉強」や「自分で調べ、考える姿勢」については、昨年度と比べて平均値がやや上昇していることが認められる。

他方、授業時以外の学習時間の短さについては、多くの担当教員が改善の必要のある事項として意識しつつも、課題を増やす、参考文献をより多く紹介するといった改善策以外には、具体的な打開方法を見出すことが難しい状況であると言えよう。継続して科目を担当している教員からは、工夫しても改善が思うように進まない項目として言及されている。

上記のように、授業が発展的な勉強のきっかけになったことについては、相対的に高い評価が得られているにも拘わらず、授業時以外の学習時間が相対的にかなり短いという数値が出ていることについては、一つには、学生が受講にあたって下調べ・予習といった事前準備の学習時間が短いと自覚している可能性も考え得るのではないかな。

毎回の授業のための下調べ・予習といった事前学習とは異なるが、所見を見る限り、事後学習にあたる、授業時以外の学習を促す課題を出す工夫をすでに行っている教員も少なくない。そのような、授業の事後学習の充実に向けての改善を今後一層はかるとともに、その事後学習を通して、学生の継続的かつ自主的な「自分で調べ、考える姿勢」の形成をはかることが今後の大きな課題になると考えられる。

5. 2013 年度のまとめと今後の展望

2013 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 神橋 一彦

2013 年度は、2009 年度に教育改革推進会議において策定された「基本方針」（中期的な実施計画）に基づき、2010 年度以来 2 度目の「1 教員 1 科目」の方針により実施された。授業評価アンケートは、本学における教育インフラの重要な一部を構成するものであるが、かかる事業がこのたび無事に実施され、報告書の作成に至ったことにつき、関係各位の協力に対して衷心より感謝の意を表するものである。

2013 年度の 1 年間において、「学生による授業評価アンケート」をめぐる取り組みとして特記すべき事項を挙げれば、下記の通りである。

(1) アンケートの実施については、①上述のように「1 教員 1 科目」の方針に基づいて行ったことにより、過去最多の実施科目数となった。実施科目数は、前期 879 科目、後期 823 科目、合計 1,702 科目で全学の実施率（実施科目数／実施予定科目数）は 97.89%（1,661/1,702）であった。また、②実施方法については、できるだけ授業が進行した時点でアンケートを実施したいとの要望を受け、2012 年度に引き続き、アンケートの実施を授業最終週にもできるようにしたことに加え、アンケート用紙の配布場所を、12 号館 1 階の図書館脇に移動し、円滑に配布を実施するように配慮した。

(2) アンケート結果の利用等については、①所見票閲覧システムのアクセス範囲について改善を行い、従来、学内のイントラネット経由での閲覧に限られていたものを、2013 年 7 月下旬より、学外からも、V-CampusID/PW があれば閲覧可能にすることとし、アクセス範囲を拡大した。このことについては、本学のホームページにより、学生に対しても周知伝達を行った。②集計結果のとりまとめについては、今回の 2013 年度については、新たに、設問項目別平均値につき、学部等における比較が可能な一覧を作成した。かかるデータについては、アンケートの実施自体、もとより全科目に及ぶものではなく、また各学部等ごとにおいても実施対象科目の選定方針に違いがあるため、実施科目に偏りがあることなどを留意する必要があるが、学部等間の特性等、比較検討の一助となれば幸いである。

(3) また今後のアンケートの実施に関しては、実施学部より、実施時における外国人留学生に対する負担を考慮して、英語による OMR 用紙の導入検討につき意見が寄せられたところである。これについては、2014 年度、現に少なからぬ数の授業が英語によって行われているところから、学部独自の設問の取り扱いなどについて種々課題はあるものの、2015 年度の導入に向けて、現在検討が行われているところである。

各学部の総評をみると、前年度と同様、当該授業に関連して授業時以外に学習した時間が少ないことや、授業そのものについてはある程度真面目に取り組んでいたり、授業自体に対する満足度は低くないにもかかわらず、学生が授業をきっかけにして発展的な勉強をすることについては消極的であることについて、多くの学部から問題点の指摘があった。この点については授業内容が多種多様であることもあり、なかなか一律の対策、対応が論じられないという事情がある。もっともそのような中であって、CHORUS や Blackboard

の活用などにより学生の主体的な学びを喚起する取り組みも地道に続けられているところであり、そのような模索の成果を今しばらく注視する必要があるであろう。またその点に関しては、FD活動との関連で、授業内容や授業改善方法の共有化の必要が多くの学部から指摘されている。

また、授業そのものに関連するものとしては、授業の技術的な手法、とりわけパワーポイントなどの教育機器の活用のあり方にかかわる指摘も目を引いた。これについては、多くの学部においてこれらの授業技術の改善・工夫について、その必要性は認識されているものの、パワポを使えば板書ができない、板書をすれば字が汚いなど、授業時における教員と学生との間の、いわば「呼吸の不一致」というべき問題点を指摘するものもあった。さらに、授業環境については、私語対策の必要が、特に大規模授業において引き続き指摘されているところであり、この点もなお継続的な取り組みが必要であろう。

「学生による授業評価アンケート」も、2013年度で10回を経験することとなった。ある種の「アンケート疲れ」「アンケート慣れ」に対する危惧から3年ごとに1教員・1科目実施という方針をとったが、学生の動向や授業や教育を取り巻く環境は時々刻々と変化している。今後ともアンケート結果の多角的分析が行われるとともに、データが真に教育改善に資するよう利用されること、あわせて今後のアンケートの実施が、引き続きよりよい授業に向けた学部等並びに教員の努力を喚起、促進するものとなるよう期待する次第である。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 110,027名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	22,675	15,618	68.88
経済	18,633	10,430	55.98
理	7,427	4,821	64.91
社会	20,063	11,144	55.55
法	18,985	8,194	43.16
経営	15,449	9,438	61.09
異文化コミュニケーション	2,802	2,196	78.37
観光	9,990	6,654	66.61
コミュニティ福祉	11,047	6,926	62.70
現代心理	9,050	5,558	61.41
全学共通カリキュラム	43,145	26,292	60.94
学校・社会教育講座	3,634	2,756	75.84
合計	182,900	110,027	60.16

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	2,647	5,370	5,009	2,214	378	15,618
経済	2,816	3,059	2,795	1,598	162	10,430
理	1,399	1,843	1,244	264	71	4,821
社会	3,287	3,681	2,718	1,239	219	11,144
法	2,009	2,443	2,481	1,129	132	8,194
経営	3,219	2,989	1,808	1,042	380	9,438
異文化コミュニケーション	948	523	478	179	68	2,196
観光	1,286	2,325	2,119	837	87	6,654
コミュニティ福祉	1,299	2,462	2,244	798	123	6,926
現代心理	1,078	2,060	1,721	567	132	5,558
全学共通カリキュラム	10,228	8,330	4,430	2,553	751	26,292
学校・社会教育講座	1,050	1,020	502	72	112	2,756
合計	31,266	36,105	27,549	12,492	2,615	110,027

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 全学集計

表3 全学平均値

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	109,794	91.01	14.31
I 2 この授業に積極的に参加した	109,765	3.91	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	109,690	3.27	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	109,583	3.19	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	109,165	3.57	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	109,539	0.90	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	109,738	4.02	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	109,717	4.00	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	109,657	4.01	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	109,574	4.04	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	109,509	4.00	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	108,683	3.92	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	65,775	3.60	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	88,027	4.13	0.96
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	107,166	4.26	0.85
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	109,598	3.90	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	109,594	3.89	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	109,562	3.47	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	109,420	3.78	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	109,576	3.96	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	109,563	3.98	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	109,560	3.83	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	109,550	3.93	1.03

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013 年度より、I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013 年度より、I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 設問項目別平均値 (学部等間比較)

全学および学部等別延べ回答者数およびアンケート実施科目数													
学部等	全学	文	経済	理	社	法	経営	異文化	観光	コミ福	現心	全カリ	講座
回答者数	110,027	15,618	10,430	4,821	11,144	8,194	9,438	2,196	6,654	6,926	5,558	26,292	2,756
科目数	1,666	275	165	99	136	72	175	93	95	113	77	303	63

注) 下表の平均値は、科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

学部間等比較		設問項目												
		全学	文	経済	理	社	法	経営	異文化	観光	コミ福	現心	全カリ	講座
I この授業へのあなたの取り組み方について...														
I1	授業全体を通じての出席率*1	91.01	91.73	89.33	92.90	91.57	87.38	93.08	94.25	89.79	89.70	90.14	91.30	94.00
I2	この授業に積極的に参加した	3.27	3.94	3.92	4.02	3.80	3.68	4.05	4.12	3.89	3.90	3.85	3.90	4.07
I3	この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.91	3.35	3.30	3.34	3.14	3.02	3.61	3.49	3.20	3.27	3.16	3.20	3.46
I4	授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.19	3.32	3.22	3.27	3.05	2.97	3.56	3.50	3.14	3.17	3.06	3.10	3.36
I5	シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3.57	3.73	3.40	3.35	3.46	3.41	3.51	3.56	3.65	3.60	3.63	3.63	3.62
I6	この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	0.90	0.92	1.00	1.18	0.79	0.96	1.36	1.11	0.76	0.84	0.71	0.74	0.83
II この授業の進め方は...														
II1	聞きやすい話し方だった	4.02	4.08	3.90	3.85	3.81	3.84	4.09	4.21	3.97	4.04	4.06	4.12	4.26
II2	各回の授業内容の量が適切だった	4.00	4.09	3.86	3.76	3.89	3.79	4.00	4.15	4.02	4.05	4.07	4.11	4.17
II3	各回の授業のねらいは明確だった	4.01	4.05	3.92	3.85	3.85	3.83	4.07	4.13	4.00	4.06	4.05	4.09	4.20
II4	各回の授業内容は明確だった	4.04	4.09	3.94	3.87	3.88	3.87	4.09	4.17	4.04	4.08	4.08	4.12	4.23
II5	十分な静肅性が保たれた	4.00	4.06	3.99	4.04	3.64	4.00	4.04	4.02	4.03	4.05	4.18	4.02	4.34
II6	教科書・授業レジュメや参考文献が効果的だった	3.92	4.02	3.83	3.79	3.74	3.72	3.96	4.02	3.97	3.97	4.00	3.98	4.21
II7	板書のしかたが適切だった	3.60	3.67	3.53	3.63	3.42	3.30	3.79	3.74	3.62	3.63	3.69	3.64	3.84
II8	映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	4.13	4.18	3.88	3.87	3.99	3.79	4.17	4.30	4.17	4.16	4.27	4.27	4.23
II9	教員は授業の準備を周到に行っていた	4.26	4.32	4.15	4.12	4.12	4.09	4.28	4.42	4.30	4.26	4.35	4.35	4.36
III この授業から得ることができたもの														
III1	自分にとって新しい考え方・発想	3.90	4.00	3.65	3.72	3.79	3.68	4.02	4.21	3.92	3.91	3.93	3.97	4.10
III2	授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.89	3.96	3.82	3.84	3.75	3.79	4.07	4.10	3.88	3.87	3.93	3.86	4.04
III3	自分で調べ、考える姿勢	3.47	3.56	3.45	3.58	3.32	3.33	3.79	3.76	3.43	3.46	3.33	3.39	3.61
III4	授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.78	3.84	3.64	3.47	3.74	3.68	3.93	3.99	3.75	3.81	3.74	3.80	3.96
IV 総合的にみて、この授業は...														
IV1	わかりやすい授業だった	3.96	4.03	3.82	3.72	3.80	3.78	4.01	4.12	3.96	3.99	4.00	4.07	4.20
IV2	授業全体の目標が明確だった	3.98	4.04	3.89	3.83	3.82	3.84	4.08	4.13	3.96	4.02	4.01	4.05	4.17
IV3	学問の興味をかきたてられた	3.83	3.95	3.65	3.65	3.70	3.67	3.94	4.06	3.82	3.81	3.88	3.90	3.92
IV4	この授業を受けて満足した	3.93	4.03	3.78	3.72	3.78	3.75	4.01	4.15	3.92	3.97	3.98	4.01	4.11

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

5: 大いにそう思う、4: そう思う、3: どちらともいえない、2: あまりそう思わない、1: そう思わない

*1) 2013年度より、IIは回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5: 90%以上」=100、「4: 70-89%」=80、「3: 50-69%」=60、「2: 30-49%」=40、「1: 30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5: 3時間以上」=3.5、「4: 2-3時間」=2.5、「3: 1-2時間」=1.5、「2: 1時間未満」=0.5、「1: 0時間」=0

表5 学年別平均値

学年別延べ回答者数

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答者数	31,266	36,105	27,549	12,492	107,412

注) 学年は、当該学部で実施したアンケートに回答した学生の学年

学年別平均値 (全学)

設 問 項 目	1年	2年	3年	4年
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	94.03	91.72	89.66	84.48
I 2 この授業に積極的に参加した	3.95	3.92	3.85	3.86
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.25	3.30	3.24	3.24
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.09	3.22	3.22	3.28
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	3.37	3.61	3.65	3.72
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	0.89	0.90	0.87	0.95
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	3.94	4.01	4.04	4.15
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3.94	4.00	4.02	4.13
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3.95	4.00	4.01	4.13
II 4 各回の授業内容は明確だった	3.98	4.03	4.05	4.17
II 5 十分な静粛性が保たれた	3.84	4.03	4.08	4.16
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3.89	3.92	3.93	4.00
II 7 板書のしかたが適切だった	3.52	3.60	3.63	3.70
II 8 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	4.08	4.13	4.17	4.19
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.23	4.25	4.28	4.35
III この授業から得ることができたもの				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3.84	3.89	3.91	4.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3.83	3.89	3.90	3.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.40	3.49	3.47	3.54
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.67	3.77	3.82	3.94
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	3.89	3.95	3.98	4.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3.92	3.98	3.99	4.13
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3.75	3.83	3.85	3.99
IV 4 この授業を受けて満足した	3.85	3.92	3.95	4.09

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 授業規模別平均値

授業規模別延べ回答者数およびアンケート実施科目数(全学)

授業規模	50名以下	51~100名	101~150名	151名以上	合計
回答者数	20,943	30,967	24,098	34,019	110,027
科目数	866	434	197	169	1,666

注) 授業規模は履修者数ではなく、実際の出席者数に近いと思われる回答者数を使用した。
下表の平均値は、授業規模別の科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

授業規模別平均値(全学)

設問項目	50名以下	51~100名	101~150名	151名以上
I この授業へのあなたの取り組み方について…				
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	91.17	90.26	90.40	92.02
I 2 この授業に積極的に参加した	4.04	3.89	3.85	3.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.45	3.24	3.22	3.22
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.44	3.17	3.12	3.10
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3.64	3.55	3.57	3.53
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	1.16	0.87	0.83	0.82
II この授業の進め方は…				
II 1 聞きやすい話し方だった	4.18	4.01	3.98	3.95
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4.12	3.98	3.99	3.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4.14	3.99	3.98	3.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	4.19	4.03	4.00	3.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	4.44	4.13	3.92	3.68
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4.09	3.92	3.90	3.84
II 7 板書のしかたが適切だった	3.83	3.60	3.54	3.48
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	4.24	4.14	4.12	4.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.38	4.26	4.24	4.21
III この授業から得ることができたもの				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4.06	3.86	3.85	3.86
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4.04	3.88	3.84	3.82
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.73	3.44	3.39	3.39
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.90	3.73	3.74	3.76
IV 総合的にみて、この授業は…				
IV 1 わかりやすい授業だった	4.11	3.93	3.93	3.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4.14	3.97	3.95	3.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4.00	3.79	3.79	3.79
IV 4 この授業を受けて満足した	4.11	3.90	3.89	3.88

注) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

6-3 学部等別平均値

表7 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	15,588	91.73	12.57
I 2 この授業に積極的に参加した	15,581	3.94	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	15,564	3.35	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	15,550	3.32	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	15,481	3.73	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	15,548	0.92	0.94
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	15,575	4.08	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	15,573	4.09	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	15,567	4.05	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	15,549	4.09	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	15,543	4.06	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	15,426	4.02	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	10,483	3.67	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	11,065	4.18	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	15,153	4.32	0.82
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	15,561	4.00	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	15,562	3.96	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	15,557	3.56	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	15,540	3.84	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	15,562	4.03	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	15,560	4.04	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	15,561	3.95	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	15,563	4.03	1.00
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	15,153	4.26	0.94
V 2 この授業の受講者数は適切だった	15,141	4.23	0.94

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	10,401	89.33	16.62
I 2 この授業に積極的に参加した	10,397	3.92	1.02
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,397	3.30	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,376	3.22	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	10,339	3.40	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	10,373	1.00	0.96
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,393	3.90	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,392	3.86	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,383	3.92	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,377	3.94	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,373	3.99	1.06
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,302	3.83	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	7,263	3.53	1.16
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,477	3.88	1.05
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,168	4.15	0.91
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,384	3.65	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,382	3.82	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,379	3.45	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,357	3.64	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,376	3.82	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,371	3.89	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,372	3.65	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	10,365	3.78	1.09
V 学部等による設問			
V 1 （全科目共通設問）教室の規模と設備は適切であった	8,050	4.16	0.99
V 2 （基礎ゼミナール2）経済文献を読む力がついた	569	3.91	0.94
V 3 （基礎ゼミナール2）レジュメやレポート作成の力がついた	565	4.10	0.90
V 4 （情報処理系科目）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	768	4.07	0.95
V 5 （情報処理系科目）Power Pointでプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	772	3.85	1.07
V 6 （情報処理系科目）WEB上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	779	3.91	0.99

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 ^{*1}	4,807	92.90	14.11
I 2 この授業に積極的に参加した	4,806	4.02	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,805	3.34	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,802	3.27	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,788	3.35	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 ^{*2}	4,797	1.18	0.99
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,807	3.85	1.07
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,803	3.76	1.07
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,802	3.85	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,801	3.87	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,798	4.04	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,766	3.79	1.09
II 7 板書のしかたが適切だった	4,024	3.63	1.16
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,937	3.87	1.03
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,693	4.12	0.92
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,796	3.72	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,797	3.84	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,794	3.58	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,787	3.47	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,794	3.72	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,795	3.83	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,795	3.65	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	4,794	3.72	1.06
V 学部等による設問			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,661	3.87	0.90
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,643	3.97	0.93
V 3 (1年次前期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	673	3.69	1.04
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,537	3.74	1.09

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	11,124	91.57	13.80
I 2 この授業に積極的に参加した	11,114	3.80	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	11,113	3.14	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	11,103	3.05	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	11,062	3.46	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	11,092	0.79	0.87
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	11,107	3.81	1.11
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	11,106	3.89	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	11,097	3.85	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	11,090	3.88	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	11,087	3.64	1.22
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	11,008	3.74	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	5,968	3.42	1.08
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	9,445	3.99	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,852	4.12	0.88
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	11,088	3.79	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	11,088	3.75	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	11,085	3.32	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	11,064	3.74	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	11,078	3.80	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	11,071	3.82	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	11,078	3.70	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	11,075	3.78	1.05

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	8,176	87.38	18.98
I 2 この授業に積極的に参加した	8,181	3.68	1.08
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,170	3.02	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,169	2.97	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	8,128	3.41	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	8,157	0.96	0.91
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,168	3.84	1.16
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,167	3.79	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,163	3.83	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,159	3.87	1.03
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,150	4.00	1.06
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,100	3.72	1.10
II 7 板書のしかたが適切だった	5,881	3.30	1.16
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,779	3.79	1.14
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,979	4.09	0.94
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,161	3.68	1.03
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,159	3.79	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,156	3.33	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,145	3.68	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,160	3.78	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,156	3.84	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,159	3.67	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	8,158	3.75	1.10

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013 年度より、I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013 年度より、I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

表 1 2 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	9,421	93.08	12.70
I 2 この授業に積極的に参加した	9,417	4.05	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,411	3.61	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,408	3.56	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,383	3.51	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	9,398	1.36	1.14
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,417	4.09	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,413	4.00	0.98
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,405	4.07	0.94
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,405	4.09	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,397	4.04	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,351	3.96	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	4,571	3.79	1.06
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,216	4.17	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,177	4.28	0.86
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,401	4.02	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,398	4.07	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,394	3.79	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,386	3.93	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,401	4.01	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,395	4.08	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,391	3.94	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	9,391	4.01	1.02

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013 年度より、I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013 年度より、I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

表13 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	2,190	94.25	10.67
I 2 この授業に積極的に参加した	2,194	4.12	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,190	3.49	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,189	3.50	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,179	3.56	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	2,189	1.11	0.96
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,194	4.21	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,194	4.15	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,191	4.13	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,187	4.17	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,188	4.02	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,158	4.02	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	1,303	3.74	1.10
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,661	4.30	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,133	4.42	0.81
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,193	4.21	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,192	4.10	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,192	3.76	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,189	3.99	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,192	4.12	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,193	4.13	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,192	4.06	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	2,191	4.15	1.01

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 4 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	6,647	89.79	13.88
I 2 この授業に積極的に参加した	6,645	3.89	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,640	3.20	0.97
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,635	3.14	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,607	3.65	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	6,634	0.76	0.85
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,647	3.97	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,646	4.02	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,647	4.00	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,638	4.04	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,630	4.03	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,582	3.97	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	3,195	3.62	1.07
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,072	4.17	0.92
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,489	4.30	0.82
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,641	3.92	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,641	3.88	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,642	3.43	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,635	3.75	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,644	3.96	1.01
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,645	3.96	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,642	3.82	1.04
IV 4 この授業を受けて満足した	6,644	3.92	1.02
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,556	4.10	1.05
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,556	4.09	0.99
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	6,542	4.17	0.91
V 4 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	6,516	3.57	1.15
V 5 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	6,524	3.35	1.21
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	6,522	3.53	1.19

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013 年度より、I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013 年度より、I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

表15 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	6,911	89.70	14.24
I 2 この授業に積極的に参加した	6,909	3.90	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,908	3.27	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,903	3.17	1.05
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,864	3.60	0.96
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	6,898	0.84	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,912	4.04	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,913	4.05	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,905	4.06	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,902	4.08	0.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,900	4.05	0.97
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,842	3.97	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	4,151	3.63	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	6,103	4.16	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,772	4.26	0.82
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,901	3.91	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,905	3.87	0.87
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,904	3.46	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,893	3.81	0.90
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,905	3.99	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,906	4.02	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,906	3.81	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	6,906	3.97	0.95

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表16 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	5,548	90.14	13.90
I 2 この授業に積極的に参加した	5,541	3.85	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,534	3.16	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,525	3.06	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	5,509	3.63	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	5,531	0.71	0.83
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,543	4.06	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,541	4.07	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	5,539	4.05	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	5,534	4.08	0.93
II 5 十分な静粛性が保たれた	5,536	4.18	0.91
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,479	4.00	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	2,905	3.69	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	5,021	4.27	0.87
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,434	4.35	0.79
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	5,534	3.93	0.95
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,535	3.93	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	5,535	3.33	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,530	3.74	0.97
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	5,535	4.00	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	5,538	4.01	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	5,538	3.88	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	5,537	3.98	1.00
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	5,437	4.20	0.85
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	5,433	4.21	0.88
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	5,416	4.03	0.95

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表17 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	26,226	91.30	13.82
I 2 この授業に積極的に参加した	26,228	3.90	0.95
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	26,209	3.20	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	26,175	3.10	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	26,096	3.63	1.01
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	26,174	0.74	0.89
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	26,223	4.12	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	26,216	4.11	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	26,205	4.09	0.92
II 4 各回の授業内容は明確だった	26,181	4.12	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	26,160	4.02	1.01
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	25,940	3.98	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	13,837	3.64	1.04
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	23,236	4.27	0.89
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	25,635	4.35	0.79
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	26,191	3.97	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	26,187	3.86	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	26,177	3.39	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	26,152	3.80	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	26,182	4.07	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	26,184	4.05	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	26,178	3.90	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	26,178	4.01	0.99
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	23,818	4.05	1.07
V 2 この授業の受講者数は適切だった	23,708	4.03	1.00
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	23,684	4.14	0.93

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013年度より、I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013年度より、I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 8 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 _{*1}	2,755	94.00	10.89
I 2 この授業に積極的に参加した	2,752	4.07	0.88
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,749	3.46	0.97
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,748	3.36	1.04
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,729	3.62	0.98
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 _{*2}	2,748	0.83	0.86
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,752	4.26	0.90
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,753	4.17	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,753	4.20	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,751	4.23	0.88
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,747	4.34	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,729	4.21	0.89
II 7 板書のしかたが適切だった	2,194	3.84	1.00
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,015	4.23	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,681	4.36	0.81
III この授業から得ることができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,747	4.10	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,748	4.04	0.86
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,747	3.61	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,742	3.96	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,747	4.20	0.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,749	4.17	0.91
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,748	3.92	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	2,748	4.11	0.96

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

*1) 2013 年度より、I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

*2) 2013 年度より、I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3 時間以上」=3.5、「4:2-3 時間」=2.5、「3:1-2 時間」=1.5、「2:1 時間未満」=0.5、「1:0 時間」=0

6-4 「グループ集計」科目一覧

表19 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	外書講読・英A	前期
2	外書講読・英A	前期
3	外書講読・英A	前期
4	ビジネス英語1	前期
5	ビジネス英語1	前期
6	ビジネスパーソンの英語1	前期
7	ビジネス英語1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期
6	情報処理入門	前期
7	情報処理入門	前期
8	情報処理入門	前期
9	情報処理入門	前期
10	情報処理入門	前期
11	情報処理入門	前期
12	情報処理入門	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	前期
2	経済情報処理A	前期
3	経済情報処理C	前期
4	政策情報処理A	前期
5	財務情報処理A	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	経済分析演習A	前期
2	経済社会演習A	前期
3	国際経済演習A	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	経済学	後期
2	経済学	後期
3	経済学	後期
4	経済学	後期
5	経済学	後期

グループ6

No.	科目名	学期
1	経済原論A	後期
2	経済原論A	後期
3	経済原論A	後期
4	経済原論A	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	経済原論B	後期
2	経済原論B	後期
3	経済原論B	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	簿記	後期
2	簿記	後期
3	簿記	後期
4	簿記	後期
5	簿記	後期
6	簿記	後期
7	簿記	後期
8	簿記	後期
9	簿記	後期
10	簿記	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期
13	基礎ゼミナール2	後期

グループ11

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール2	後期
2	基礎ゼミナール2	後期
3	基礎ゼミナール2	後期
4	基礎ゼミナール2	後期
5	基礎ゼミナール2	後期
6	基礎ゼミナール2	後期
7	基礎ゼミナール2	後期
8	基礎ゼミナール2	後期
9	基礎ゼミナール2	後期
10	基礎ゼミナール2	後期
11	基礎ゼミナール2	後期
12	基礎ゼミナール2	後期
13	基礎ゼミナール2	後期
14	基礎ゼミナール2	後期
15	基礎ゼミナール2	後期
16	基礎ゼミナール2	後期

表 2 0 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	リーダーシップ入門(BL0)	前期
2	リーダーシップ入門(BL0)	前期
3	リーダーシップ入門(BL0)	前期
4	リーダーシップ入門(BL0)	前期
5	リーダーシップ入門(BL0)	前期
6	リーダーシップ入門(BL0)	前期
7	リーダーシップ入門(BL0)	前期
8	リーダーシップ入門(BL0)	前期
9	リーダーシップ入門(BL0)	前期
10	リーダーシップ入門(BL0)	前期
11	リーダーシップ入門(BL0)	前期
12	リーダーシップ入門(BL0)	前期
13	リーダーシップ入門(BL0)	前期
14	リーダーシップ入門(BL0)	前期
15	リーダーシップ入門(BL0)	前期
16	リーダーシップ入門(BL0)	前期
17	リーダーシップ入門(BL0)	前期
18	リーダーシップ入門(BL0)	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期
9	BL1	後期
10	BL1	後期
11	BL1	後期
12	BL1	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期
8	BL2	前期
9	BL2	前期
10	BL2	前期

表 2 1 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	Cultural Exchange	前期
2	Cultural Exchange	前期
3	Cultural Exchange	前期
4	Cultural Exchange	前期
5	Cultural Exchange	前期
6	Cultural Exchange	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習2	後期
2	基礎演習2	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期

表 2 2 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会学1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	現代キリスト教人間学	前期
2	いのちの倫理学	前期
3	情報処理3	前期
4	家族社会学	前期
5	社会保障論1	前期
6	宗教心理学	前期
7	ライフサイクルの心理学	前期
8	グリーンスタディ	前期
9	死生学	前期
10	社会福祉発達史2	前期
11	公衆衛生学	前期
12	リスクマネジメント論	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	児童福祉論	前期
2	福祉機器論	前期
3	介護概論	前期
4	医学概論	前期
5	ソーシャルワーク論	前期
6	社会福祉法制	前期
7	公的扶助論	前期
8	高齢者福祉論	前期
9	地域福祉論	前期
10	女性福祉論	前期
11	福祉環境論	前期
12	医療福祉論	前期
13	精神保健福祉援助技術各論1	前期
14	福祉産業論	前期
15	司法福祉論	前期
16	老年臨床心理学	前期
17	精神保健学1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	地球コミュニティ論	前期
2	経営組織論	前期
3	健康政策	前期
4	国際経済論	前期
5	地方財政論	前期
6	エスニシティ論	前期
7	質的リサーチ	前期
8	ソーシャルサポート論	前期
9	社会開発論	前期
10	公共哲学	前期
11	住宅政策	前期
12	教育政策	前期
13	自治体政策計画論	前期
14	災害心理学	前期
15	福祉とレクリエーション	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	生理学	前期
2	運動方法学	前期
3	ウエルネススポーツ医学	前期
4	身体文化論	前期
5	スポーツコーチ学	前期
6	小児保健・精神保健	前期
7	メンタルマネジメント	前期
8	バイオメカニクス	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	心理学2	後期
3	社会教育施設論2	後期
4	社会教育計画2	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	情報処理2	後期
2	キャリア形成論1	後期
3	キャリア形成論2	後期
4	コミュニティ福祉とキリスト教	後期
5	社会調査法	後期
6	人権論	後期
7	老年学	後期
8	障害学入門	後期
9	臨床社会学	後期
10	家族心理学の基礎	後期
11	ファシリテーション論	後期
12	グループダイナミクス	後期
13	宗教人間学	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	発達障害論	後期
2	ソーシャルワーク論2	後期
3	心理学理論と心理的支援	後期
4	障害者福祉論	後期
5	地域福祉論2	後期
6	グループワーク	後期
7	精神障害者の生活支援システム	後期
8	家族臨床心理学	後期
9	就労支援サービス	後期
10	障害幼児ソーシャルワーク論	後期
11	福祉臨床原論	後期
12	社会福祉施設経営論	後期
13	福祉情報論	後期
14	リハビリテーション論	後期
15	リハビリテーション心理学	後期
16	福祉学特論	後期
17	精神保健学2	後期
18	精神保健福祉援助技術各論2	後期
19	精神科リハビリテーション学1	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	家族政策	後期
2	地方自治論	後期
3	政策学の基礎知識	後期
4	コミュニティと文化	後期
5	福祉政策	後期
6	少年非行論	後期
7	余暇生活論	後期
8	行政学	後期
9	環境政策	後期
10	比較文化心理学	後期
11	NPO論	後期
12	障害者スポーツ論	後期
13	データ分析法	後期
14	コミュニティ政策特論	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	ウエルネス科学総論	後期
2	運動処方・療法	後期
3	スポーツ科学総論	後期
4	アダプテッドスポーツ論	後期
5	スポーツ社会学	後期
6	ストレングス・コンディショニング論	後期
7	コミュニティスポーツ論	後期
8	レクリエーション援助論	後期
9	スポーツビジネス論	後期
10	スポーツマネジメント論	後期

表 2 3 現代心理学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	統計法1	前期
2	統計法1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	統計法2	後期
2	統計法2	後期

大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会 (2014 年 9 月現在)

部会長	原 田	久	(法学部、副総長)
	堀	耕 治	(現代心理学部長)
	松 本	康	(教務部長、社会学部)
	石 田	和 彦	(総長室教学改革課)
	林	英 明	(教務部全学共通カリキュラム事務室)
事務局	今 田	晶 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)

2013 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	神 橋	一 彦	(教務部副部長、法学部)
事務局	今 田	晶 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)
	間 中	賢 治	(教務事務センター)
	山 田	悦 子	(新座キャンパス事務部教務課)

2013 年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2014 年 9 月発行

編集 立教大学 2013 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

